



Title	トーパー・シュクラー (2)
Author(s)	ラーヒー, マースーム・ラザー
Citation	印度民俗研究 別巻. 1986, 3, p. 1-49
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/50367">https://hdl.handle.net/11094/50367</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ト ー ピ ー ・ シ ュ ク ラ ー

(2)

ラーヒー・マースーム・ラザー

ト ー ピ ー の 会 訳

天 野 到

藤 原 誠

家 本 太 郎

児 玉 エデラ

高 木 圭 子

サキーナーがトーピーにラーキーを結ぶのを拒否したという事は大学中に広まった。彼女が体裁の上からトーピーと兄弟の契りを結んだりしなかったと言って、サキーナーの勇気を称える者もいた。トーピーは、恋人にラーキーを結ばせに行ったといつて非難された。

「もしねえさんが話さんかったんなら誰が話したと言うの？」トーピーはサキーナーに言った。「この事は他の誰も知らん筈やないか。」

「トーピー、うちにやれもしだののしだの言わんようにして欲しいわ。まぬけた話や。」

「呆れたわ。言葉だけの祝福は尽きることがないようやね。」トーピーは少し沈んで、「なあねえさん、これは深刻な問題や。こちらに聞いてみしてくれ。」と言ってイッファンの方に向き直った。「イッファン、言うてくれ、この大学に来たからにや、俺は他の大学にうつる資格はのうなった。こんな噂がひろまってしもたら就職なんか一体できるやろか。」

「うちの顔に泥ぬった思うて、悩んでくれとるんか思うたのに。」サキーナーがふくれてみせた。

「きょうびは、誰かの恥より仕事の方が大事やねん。」

「へえ、なら仕事にありつく為には、うちの顔をつぶしてもええというわけ。」

「イッファンがねえさんを疑わん限り、困ることはないやろ。聞きたいんは、ラーキーのことがなんで外に知れたかいうことや。」

次の日、上の話でも家の外に洩れた。ラフマトの茶店で幾人かがトーピーにからむと、トーピーは頭に血が上った。

「どっか体の具合でも悪いんか。」

まずいことに、トーピーが相手にしたのは、三流どころのお兄さんだった。彼は早速腕をまくりあげた。

トーピーは喧嘩の仕方を知らなかった。殴られた。

町の新聞はこの事件に飛びついた。そして大学ではイッファンの株が下がり始めた。イッファンが学識浅からず、才のある人だということは衆目の一致するところだった。大変熱心に教えているとの評判だった。しかし、教官の妻が学生と妙な関係になったのでは、学識も台無しだ。という訳で、大学では、イッファンは助教授になれないと、公然と口にされた。その結果、スハイル・カードリー博士の幅がきき始めた。

「ザルガームさんは気の毒なことや。」カードリー博士はある晩、スタッフ・クラブのブリッジの席でこう言った。「彼のプライバシーと大学とは何の関係もありませんのに。まあ昨今噂にのぼっとることがほんまやとしても……。」

「切り札は？」彼の相手が言った。

「なし。」

「クラブが5枚」カードリー博士はゲームの方に夢中になった。

今や、イッファンが助教授になれる可能性が危くなったというのに、トーピーが講師になれるかどうかなど問題外だった。故にヒンディー学科においては、アナウル・ムジャトバー・ザイディーとラームヴィラース・「ペーカタク」の株が上がり始めた。

アナウル・ムジャトバー・ザイディー氏は「ペーカタク」さんの後輩だった。「ペーカタク」さんの論文は既に提出済みで、ザイディー氏の論文は盗難にあった。しかし、アリーガル大学は唯一のムスリム大学であるから自分の権利は保証されているというのが、ザイディー氏の言い分だった。インド全体の仕事の口がヒンドゥーの為にあるとすれば、たった一つのムスリム大学くらいムスリムの為に口をひらく訳にはいかぬのか。

仕事の口！

ひと時代前には、興国に艱難多き長旅、それに立身出世が若者の夢だったと聞く。今では仕事につくのが若者の夢だ。仕事を手に入れることだけが、この時代の最大の冒険なのである。今日の法顕、イブン・バトゥータ、バスコ・ダ・ガマ、スコットたちは職探しに明け暮れている。今日のイエス・マホメット・ラーマたちの行きつく先は仕事の口だ。

しごと！三文字から成るこの言葉が今日の夢の基準なのだ。この基準に適う者だけが認められる。家や家族が新しく芽をふくのは仕事によって以外にはないのである。ムジャトバー・ザイディーの結婚は正に仕事にかかっていた。

ザイディーは父方の従妹ビルキース・ファートマーに恋していた。ビルキース・ファートマーも彼に夢中だった。伯父としても、娘をパキスタンには遣りたくなかった。が、そこから大変良い縁談がやってきてはいた。しかし、ムッジャンさん（アナウル・ムジャトバー・ザイディー）に、もし仕事が見つからなければ、その時は否が応でもビルキースをパキスタンに嫁がせねばならない。

昔は、恋といえば、王子様を夢見たものだが、今は職が問題だ。何でもそうだが、恋も安っぽくなったものだ。

—— どう言ったものか、ヒンドゥーびいきには参りました。もしうちの学科の主任教授がムスリムなら、ほくにもきつと職がみつかったろうが。でもビッロー、心配ご無用、仕事はどこかで必ず見つかるだろう。インドが独立して、随分妙な案配になってはきたが。——

ビルキースは、この手紙を受け取ると悲しくなった。ライターはマジューンと、シーリーンはフェルハードと、結ばれぬ運命にあるのを本で読んだことがあったからだ。彼女は祈りに祈った。全能なる神よ、ろくでなしの主任教授の心を入れかえて下さい。あなたのお出来にならぬことはないのですから。……

しかし、彼女の声は神に届かなかった。或いは、神様は、彼女の祈りに格別の注意を払わなかったのであろう。トーピーともどもアナウル・ムジャトバー・ザイディーも顧みられなかった。「ペーカタク」氏が講師にとられた。

一方、助教授の席にはカーダリー博士がおさまった。

そして、ビルキースは、パキスタンに縁づいた。

会う人はことごとく「ペーカタク」氏に祝辞を述べた。誰一人としてこう言う者はなかった、「こりゃまたどうしたわけや、トーピーの方があんたよりずっとできるんじゃないの。」とは。わが国において、学識の証明は仕事である。だから、誰もザイディー氏にこうは言わなかった。「あんたなに出しゃばったん？ペーカタクの方があんたよりよっぽど偉いで。」今や、それ程にも、大学において学殖に注意が向けられなくなっていた。

仕事は大層おそろしいものだ。外からやってきた専門家は、諸手当をとり、次の列車をつかまえるのに必死である。選出は主任教授の一存にかかり、教授のお気に召した者が採られた。時に、方々から圧力がかかるとそれすら出来なかった。

「ヒンドゥーやから採用されんかったとはもう言えん。」トーピーが言った。「イッファン、サキーナーの愛情のおかげで、俺は駄目になってもうたわ。」

「ついでに、お前の愛情のおかげで、僕も駄目になってもうたわ。」イッファンが言う。

「なら、ユニオン・オブ・ディピーティド・ラヴァーズ（失恋者組合）でもつくろやないか。」

「ユニオン・オブ・ティフィーティド・ラヴァーズやと！」イッファンは齒軋りした。

「ありゃ、こんな時にも発音問題か。」

こんどはイッファンも笑った。トーピーはつづけて、

「今世紀最大のニュースは、お聞かせしてもないんやで。」

そこでサキーナーが、「どっか仕事が見つかったん？」とせきこんで聞くと、トーピー、「まさか。奨学金が出してもらえんようになったんや。」

「ろうやから？」シャブナムがトンチンカンな質問をした。

「そう。」

「なら泥棒したんや！」

イッファンがここで、「そりゃまた阿呆らしいことやないか。」と言うとトーピーが応じて、「何が阿呆らしいもんか。大学の奨学金やで、それを出さんいうんや。」と言う。

「けど、なんで？」サキーナーがたずねた。

「なんでで、俺がそちらさんにぞっこんやからや。」特に最後のところを皮肉っぽく強調して、トーピーが言った。

「おっちゃん、ぞっこんいうてなに？」

「お母ちゃんに気があるということや。」

「シスター・アーレーマーもそう言うとした。」

「ほう！」

「ほんま。」

「なら、その人にも気があるて言うってくれ。」

「でも、こーんな顔しとるのに。」

それでもシャブナムは、シスター・アーレーマーにトーピーの言葉を伝えた。そこで更にことが込み入った。シスターは英語のエの字も出なくなった。教室の、その場で泣き出した。生徒らはあっけにとられた。先生どないしたんやろ？先生が泣くより、ウルドゥー語を喋り出したことに、生徒達は驚いていた。

シスターはマザー・スピーリヤルに苦情をもちこんだ。

「あたし、自殺します。」一鼻をチーンとやりながら英語でこう言った。

マザー・スピーリヤルは大学の副総長に電話を入れた。副総長は学生課長に。学生課長のところで、トーピーは処分された。そして、トーピーは本当はシスター・アーレーマー・シッディーキーに首ったけど、との噂が大学中にひろまった。

さてシスター・アーレーマーは部屋に入って涙をぬぐった。きれいに涙をふきとってから、鏡の前に立ってみた。そこに映るものはいつもいつも見て飽き飽きしていたものだった。黒ずんだ膚の色。小さくてみずみずしさのない目。あばた面。鶴のような首。ベチャンコの痩せた胸。自分の胸を見るといつも恥かしくなってきた、いそいで服を着るのだった。

こんどのことは、自身が醜聞のたねとなった、はじめての出来事だった。いつからこの石をぶつけられるのを待っていたことだろう。いったんこの石が投げつけられると、眠っていた身体は目をさました。

直ちに、彼女はミス・ザイディーに会いに英語科の方に足を向けた。途中で出会う美醜さまざまの女生徒らを彼女は初めて愛情をこめて見た。恋愛が許されないの、*“いややわアッラー・マージドさん”*だの*“向う行って、ハキームさん、びっくりさせるやないの”*だと言わずにはおれないあの娘らすべての痛みが今は手にとるように分った。彼女と同じ寄宿舎にカマルという娘がいた。みんなに、どこかの詩人から来た手紙を読んできかせていた。あれもこれもあの人を書いてくれてんよ。誕生日にはこのサリーを送ってくれたわ。……他の娘らは皆、カマルにやきもちを焼いて、なんやってその人はうちらには手紙をくれへんのやろと思っていた。ところがある日カマルの嘘が判った、カマルは自分で自分に手紙を書いていたのだった。このことがすっかり知れると、娘らはわざわざカマルの前で、自分とその詩人との恋物語を始めるようになった。可哀そうにカマルは家に逃げ戻った。するとこちらでは、子をおろしに帰ったのだという噂が旋風の如くまきおこった。それからカマルはもどってこない。アーレーマーは、今日あのカマルに手紙を書こうと心に決めた。もっとも、風の便りにパキスタンで高官と結婚したと聞いていた。あんな狭い国で、そんな沢山のお偉いさんがおるんは、ぜんたいどういう訳やろか。インドはこんなに広いのに、ここじゃ私らの相手に事務員も見つからへん。

さて、ミス・ザイディーはシスターの顔を見ると言った。「話をきいて心

配しとったんよ、いくらなんでも程があるわ…」

シスター・アーレーマーは一日中同情を集めた。

それというのもムスリム大学の様な環境では、恋愛はせいぜいお芝居か、程度の悪いものしかありえないからだ。ここに女学生が入学させられるのは、他の女学生が家で自分のうわさをしてくれるのを期待してのことだった。それ故娘たちはつねに人目を意識している。人目を気にしていつも辺りをうかがっているので軟派もめったに寄りつかない。こういう連中は女友達をとりかえてばかりいる。が、目に余るほどではない。せいぜい、二度映画を見に行ったり、城砦でピクニックしたり。贈り物をあげたりもらったり。手と手が触れたとか。目に入ったごみをとってもらったり、一、二通手紙のやりとりをしたり。ことが進展すると双方の友人らが秘密を守ってやる。それ以上になるとあちらでは姉さんが、こちらでは兄さんが、それぞれの部屋で夢を見る。かなわぬ夢を見る内に試験日かやってくる。試験期間には、恋などインド映画の中以外どこにありえましようや。

イスマト・チュグターイーの「ゆがんだ線」は現在でもまだまったくまっ直ぐにはなっていないのだ。

シスター・アーレーマーがアリーガル大学にやられたのも正にこの目的一つまり誰か男兄弟のいる娘さんが好いてくれはしないかという期待あったことだった。しかしそれはまず無理だった。こんな、色黒で目つきの悪いあばた娘を誰がお兄さんのお嫁さんに、などと思うだろう！年下の女学生は気に入られて、結婚ということになったのもいた。が、シスター・アーレーマーはさらの食器のように処女のまま売れのこっていた。

アーレーマーは英語を話すのを好んだ。それで高校の頃からシスター・アーレーマーと呼ばれていた。女学校校長のムマターズさんまでそう呼ぶ程だった。それからミッション・スクールの時間講師になってマザー・スピーリヤルのもとにきたときには、もうれっきとした「シスター」であった。

シスター・アーレーマーにはひとつ人と違った所があった。それは決して弱味を見せないということだった。が正にこの故にこそ、トーピーからの伝言を耳にするなり、心のつぼみが花ひらいたのだった。—あたかも初めて春という季節を見たかのように。

その晩、彼女は眠れなかった。トーピーのことを考えて胸をいためた。気の毒に、停学処分にならんとええんやけど。うちゆうたらえらい情けないことしたもんやわ、いきなり告げ口したんやから。（シスター・アーレーマーは確かに英語を話しはしたが、考えるのは母語でした。）

次の朝、憂鬱な気分で起きた。

「寝れなかったん？」と隣部屋の人がきいた。

「寝たけど。一寸いやな夢を見てん。」

「夢！」といってその娘は笑った。「夢なんか見んようにしいな、シスター。見るにええ夢はもっとわるいもんや。」

こう言ったのはマハナーズという名の娘だった。容姿はまず十人並みとい

ったところ。五六年前に娘盛りを迎えた。講師だった。しかし好きになる人は片はしから他の娘が奪ってしまい、また一人ぼっちになるのだった。仲のよかった最後の人はドクター・ヴァヒードだったが、つい先日ドクター・シャッカト・フェールキーと結婚してしまった。ドクター・ミス・フェールキーとノ（この人は女性だと言っておく必要がある。）

ドクター・ヴァヒードと交際している間、マハナーズ以外の誰もが、今度はきっと結婚にこぎつけるだろうと思い込んでいた。ただ当のマハナーズにはそうは思えなかった。

ドクター・ヴァヒードはこういった事では随分評判の悪い人だった。とにかく相手がほしい。彼のやり方もまた変わっていた。自分の奥さんにうんざりしていた。自分の家庭生活について愚痴をこぼしては、チャールミーナールをふかすのだった。

マハナーズに対しても全く同様の接し方だった。マハナーズはワージダーという娘と仲がよかった。ワージダーは彼の台詞はすらすら言えるほどだった。そんなワージダーを悲しい目に会わせたという理由でマハナーズはドクターを憎んでいた。しかしドクターの憂いを含んだ口調は彼女の心を揺さぶった。そして気がついた時にはもう後にひけなくなっていた。

だから彼女は夢を恐れるようになったのだった。

「そんな夢のことを言うてるんとちがうわ。」とシスター・アーレーマーが言った。その声はマハナーズがぎょっとするほど苦しげだった。マハナーズは一層憂鬱になった。

「トーピーいうのはどんな人やの？」とシスターが尋ねた。

「ヒンディーを研究してはる人や。歴史のザルガームさんの奥さんサキーナー・ザルガームに参とうわ。」

「ほな…。」シスターは口ごもった。

マハナーズは去って行った。シスターは廊下に一人取り残された。スルターニャー寄宿舍の壁が急に高くなったように思えた。まるで、魔法の映画に出てくる魔法の宮殿の壁のように。シスター・アーレーマーはそんな類の映画を嫌っていた。それでも、しばらくの間、彼女は、魔法使いによって魔法の宮殿に閉じ込められた王女のような気分になった。彼女は王子が来るのを待ち始めた。

しかし、王子自身が窮地に陥っていた。副学生監のムクタール氏がトーピーを詰問していたのだ。

「ほな君はシスター・アーレーマーにもう夢中いうわけやね。」

「ムクタールさん、それは…」

「相手は何歳年上かいうことも考慮せなんだわけや。」

「そんな事考慮する必要なんか初めからないんです。なんでて…」

ムクタール氏は口をはさんで、「惚れてしもたんやもんな。」と言う。

「少しはこっちの言い分もきいて下さい。」トーピーは苛立ってきた。

「言うたんさい。」



「ほなガンジスの水に誓って言わしてもらいますけど、僕は断じてシスター・アーレーマーに気いなんかありませんよ。その人を見たこともあらへんのに。」

「ガンジスの水をもってくるんは面倒や。ガンジスはこっから三十マイルもあるさかいな。はやから素直に答えたらどうや。ザルガーム氏の娘さんを通してシスター・アーレーマーに伝言を届けたんか、届けなんだんか。」

「確かに届けました。けど僕が友だちのザルガーム氏の奥さんに参っとるなんて法螺をシスター・アーレーマーが吹けるんなら、こっちかて、シスター・アーレーマーに惚れてしもた、と言うたることくらい出来るでしょう。」ムクタール氏も怒り出した。

「君は惚れたはれたの騒ぎをするためにここに来たんか。それとも勉強しにか？もう四回生やさかいに、それに初めての過失でもあるし、今回は大目に見たる。とにかくシスター・アーレーマーさんに謝ってこい。Ph. Dをとって早う家に戻れ。コミュニスト連とつき合うてろくなことはないぞ。」

忿然たる面持でトーピーは副学生監長の部屋を出た。大したことやない。シスター・アーレーマーとやらが何やいうんや…

偶然にもその日、ミス・ザイディー家でトーピーは初めてシスター・アーレーマーと顔を合わせた。

「シスター、明日はラーキー祭やね。行きますから、ラーキーを結んで下さい。」

シスターは呆然とした。

翌日、彼女は休暇をとって家に帰り、二度と戻ってこなかった。辞表を出した。しばらくの間、トーピーは大学であれこれ言われた。やがて人々はシスター・アーレーマーのことを忘れた。

のちに彼女はシムラーでサキーナーと会った。そこでも彼女は教師をしていた。

「トーピーはどうしとるん？」

アリーガルの話が出尽くしたあと、彼女はそっと尋ねた。

「論文を書いとるわ。」

「まだ？」

「就職できへんのに他にどうせえ言うん？家でごろごろするより、Ph. Dでもとる方がましや。」

## 12

奨学金が止められたのでトーピーは窺地に立たされた。と言うのは既にムンニー・バーブーは政治家になり、バイラヴも政治家志願だったからである。実際、若い者の夢といえば政治家になることくらいしか残ってない程失業問題は深刻になっていた。バイラヴとムンニー・バーブーは二人が二人とも、同じ幻影をみた。バーブー・ゴピーナートはバスの車掌に過ぎず、全くの無学だった。泥造りの粗末な家に住んでいた。しかし、魔法の杖が振られ

るとたちまちにして国会議員。その所有になるもの今や自動車一台、邸宅二軒、雌の水牛二頭である。預金は一・二の銀行にとどまらぬ。息子はアメリカで工学を勉強中。娘の結婚式の絢爛たること人をして瞠目せしめた。収税官すら彼にうやうやしく敬礼する…この上誰が何を望むだろう。そういう訳で、この二人はどちらもドクトル・ブリグ・ナーラーヤナの青油の膏薬なんぞには何の興味も示さなかったのだ。

だが、ムンニー・バーブーとバイラヴは、全く同じ道には進まなかった。ムンニー・バーブーはヒンドゥー文化、ヒンドゥー文明のスローガンが気に入った。聖なる牛を殺し、異国の神を拜んでいるムスリムどもが、一体ここで何をしとるんや。もし、ムスリムどもが一人残らずパキスタンへ遣られれば、奴らのにとってしもとる仕事かて、ヒンドゥーのものになるのや。

仕事！

何ちゅうけったくそ悪い言葉や！

こうムンニー・バーブーが思うのには訳がある。彼は自分が就きたかった仕事を、二度もムスリムにとられたのだ。

仕事は両刃の剣である。これを持って一方ではムスリムがヒンドゥーを切り、他方ではヒンドゥーがムスリムを切る。とは言え、国は独立したばかりだ。それなら、父だとか叔父、遠縁の者（遠縁の父などない。いや、あるかな）——つまり、どういう関係に当たる者であれ、独立戦争に加わった親類縁者のいる若者が、就職に有利にはならないものだろうか？ 遠きにせよ近きにせよこういった人が銃弾を浴びている時に、他の人は家でぬくぬく座っていたのだから。あるいは、仮に私が、ある委員会の一員だとしよう。そうすると委員会の管轄下にあるあらゆる職に関して私の親類や同カーストに属する者が有利になるのじゃないのか。一般大衆は馬鹿だ。こんな簡単なことも分っていない。だから一方ではこう言われている。——国民会議派はムスリムの敵や。あいつらの政治はどう見たかて政教分離主義なんかやない。ヒンドゥー政治そのものや。見てみい、警察や軍隊にムスリムは一人もおらんやないか。どっかと戦争が起こりゃ、ヒンドゥーの奴らは大砲の音を聞きざま尿意を催し、小壺持って畑に走って行くに決まっとる。——また、他方ではこう言われている。——政府はムスリムにおべっかつこうとる。ムスリムはみんなパキスタンの手先やないか。戦争がおこりゃ途端にパキスタンに寝返り打ちよるで。違いないわ。——

ムスリム青年の心にはあごひげが、ヒンドゥー青年の心にはチョーティーがはえるようになった。彼らは物理学を学んでいてさえ、ノートに解答を記す際、オームやビスミッラーの句で始めずにはおれぬのだ。

「科学やなんか勉強して何になるねん。科学的見地があつてこそやろう。」トービーが腹立たし気に言った。

「今のどういう意味やの。」サキナーがきいた。

「多分、科学的な物の見方いうことやろ。」イッファンが答えた。

「左様、じっと座って通訳しとりゃ世話ないわ。」トービーがカッとして

言った。

「はな何せえ言うねん。」イッファンも機嫌を悪くした。

「アウラングゼーブでも弁護しとったら。他に何ができる。」

「言うけどな、お前の奨学金を差止めたんは僕やないんやで。」

「そちらの妻君が差止めたんやったな。」

「トーピー、アラビア語やらペルシャ語やら使わんようにして。アラーの神のために。」サキーナーは手を合せて言った。「妻君やなんて。嫁はんとでも言やええのに。」

「あんたら二人にゃ俺の祖母さんの魂が乗り移ったみたいや。」トーピーはそう言って、イッファンの方を向いた。「自治会選挙がどうなったか知っとるか。ジャマアートの学生が、サーハブ・バークやV・M・ホールジャリードしとる。この2ホールは工学や自然科学の学生が過半数を占めとる。」

「ベナレスの、工学やなんかの学生は誰に投票するんやろ。」イッファンが問うた。「覚えとる限り、これまでムスリムの学生はベナレス大学の自治会代議員にも選ばれたことがない。それ以上のことなんか話にもならん。」

「俺らアリーガルのもんは、えらい悪い癖がついてもうたな。なんかあったらすぐ、ベナレスの話や。ベナレス大学はヒンドゥーの大学、あすこは何でも起こり得る。それやのにここはどうや。このパキスタン人養成所かていつまでもこの調子じゃやっていけんで。」

「何やて。このヒンドゥーのしゃべりが、何いうてるのん。この大学がパキスタン人養成所や言うの。」サキーナーが目くじらをたてた。

「ちゃうんやったら、何やねん。インド対パキスタンで、クリケットの試合があったら、このへんの学生はモスクに殺倒しよるで。パキスタン必勝を祈るためや。こういうあほうどもは、ここじゃアラーの神が支配権を持ってないいう事すら分っとらんや。百歩ゆずってそうやとしても、なんで国の違うパキスタンが勝つんを祈るんや、イッファン？そのくせ、あとで、就職口がない言うて泣きよる。こない言うて泣きよるんや、インドへの忠誠を示せいわれる。自分らムスリムは1857年の独立戦争のときにゃ弓矢をとったし、1921年にゃ大砲をぶっ放した。誰か、こういう奴に聞いてやればいい。えらそうに言うてるけど、今、現に何をやってるんや。」

「あんた聞いてまわったらどう。」サキーナーがおだてるように言った。

「阿呆らし、なんで行かんならん。ほっとけ。俺はあした家に帰るんや。」

「なにしに。」

「一つは、親父をおだてとかなあかんからな。Ph. D.の学位はとりました。今度博士号もとれば、学位を二つ持つことになります。その晩には青油を売らせていただきます、とこう言うんや。バルバッドラ・ナラーヤナ文学修士、哲学博士、文学博士やで！田舎もんはこんなごっつい学位を見てたまげるやろうて。こんで金に不自由はせんようになる。半年の間、半パイサも送ってくれへんのや、うちの親父は。それに、もう一つせんならん事がある。市会議員の選挙が迫っとる。兄がジャナサングに出馬したし、弟はコン

グレスや。そやから、俺は今日からコミュニストになるねん。兄と弟の他にコミュニストの立候補者があるんやけど、そいつを支持してやるんや。少しはうちの大学への義理も立つしな。ま、それに姉さんといちゃつくんにも飽いてきたし。」

サキーナーはクッションを投げつけたが、トーピーは狙いがはずれたのを見ると立上った。

「今一つだけ困っとる事があるねん。」

「汽車賃のことやろ。」サキーナーはあっさり言っただけだ。

「当たり前。」

「誰があげるねん。まっぴらごめんや。」

「けど姉さん、義弟が無賃乗車で攔まるなんて耐えられんやろ？アリーガル・ムスリム大学で哲学の博士号を取って、更に文学の博士号を取ろうという学生が切符も買わんと旅行して攔まった、というニュースが新聞に載ったら、あんたの方のこの立派な大学がどんだけ悪評を買うか、考えてもみいな。」

「うちは耐えてみせます。」

「そう言わんと貸してえな。」

「こないだ貸したお金、いつ返してくれたかいなあ。」

「利子つけて返すわ。それか、親父が死ぬまで待つか、仕事の見つかるまで待つか。」

「結婚したらええねん。お金がわんさと手に入るわ。」

「もう家に金持ちの嫁が来とる。チャンドラグプタより昔の政治地図みたいなで、その人の顔。俺は、お金の無い子と結婚するわ。」

「鏡見たことあんの。」

「毎日見とるよ。セerpier要るねん。セerpierなかったら十erpierでも二十erpierでも結構。」

お金は結局貸すことになる、サキーナーは思っていた。トーピーもむろんそのつもりだった。だが、それまで言い合いをするのが常だった。

つまり、サキーナーとトーピーは大変気の合う仲になっていたのだ。だがサキーナーはトーピーの手首にラーキーを結ばなかった。…

さて、トーピーが腰を下ろした車両はひどく込み合っていた。インドの鉄道の第一の特徴は恐らく、その混雑ぶりであろう。トーピーは大学の黒いシェールワニ服を着ていた。

「わしが食事を済ませてから座って下され。」額に大きくバラモン、とかいてあるようなバンディット・ジーは前の座席に座っている若者に向い、こっちに来て座れと言った。若者はこちらに来た。バンディット・ジーはトーピーに向って、「あんたは向うに座りなはれ。」こう言った。

「なんであっちに座らんといかんのですかね。」とトーピー。

「へえ、ほなお偉い方の頭の上にでも座るいうんか？」ここで、太鼓腹の男がどなった。

「これがご老体の頭やて言うの。」と、トーピーは座席の板を鳴らした。

「そんなにからみたいんならパキスタンにでも行ってまえ。」太鼓腹が言った。

事が飲み込めたのでトーピーは笑った。

「こりゃ失礼しました。」こう老人に謝って別の座席に腰を下ろした。しかし、周囲の人達が自分に敵意を抱いているのをひしひしと感じた。

パンディット・ジーが食事を終えると太鼓腹の男は、パンディット・ジーと話し出した。まわりの人も序々に話に加わった。その中にはムスリムも一人いた。

「けど旦那、ムスリムやいうだけで、パキスタン人やとか、この国に住む気がないとか、何で証明されるんですか。」こう、そのムスリムが言った。

「この御仁を見てみいや。」太鼓腹はトーピーを指さした、「見ておられたやろうに、旦那が食事してはったいうのに…。」

「俺はヒンドゥーや。名前はバルバッドラ・ナーラーヤナ・シュクラ。仮にセーク・サラーマトとかいう名やとしても、それが何やというんですか。この座席は乗客が座るために備え付けてあるのや。俺はなんにもパンディットさんの飯を盗もうとなんかしとらへんかった、そうやろ？あんた方が、ムスリムを反インド党に仕向けとるんやないか。このシェールワーニー服はムスリムのもんか？これはカニシカ王と一緒に入ってきたもんやし、このパージャーマーもカニシカ王の持ち込んだもんや。…」と、トーピーが言った。

「ヒンドゥーとムスリムの差別はまやかしなんや、お兄さん。これは神の戯れですわ。…」こう、パンディット・ジーが言った。

「気の毒な神さんをだしに使わんでもよろしい、パンディットさんよ。俺はヒンドゥーやのに、どこに行っても就職できへん。そちらさんは俺と一緒に座らしてくれん。それというの、俺がシェールワーニー服を着とるからや。おまけにこの布袋さんは俺をパキスタンに行かせとうてしょうがない。なあおやじさんよ、俺がムスリムやったら、あんたが食べはるんを見りや、言われんでも二歩も身をひいたやろ。それにこのお方は他でもないムスリムやけど、気の毒にムスリムであることを佯びておられる。何でそんな風に人を疑う権利がそちらにある、私もインドの一市民や、とも言いはらへん。この人の心に根づいた恐れは、今日、一般と深まったことやろ。今後、旅行するときは、二、三十人ムスリムの乗っとる車両にだけ座りはるやろう。ほんで、もし誰かが、ヒンドゥーはムスリムに穏やかな暮らしをさせてくれんてこの人に言うたら、今日の旅を思い出しはることやろ。もし、一般の車両で食事ができんのなら、あんたは落ち着いて食事ができるようヒンドゥーだけの車両を走らすように、政府に頼んだらええ。ラーマ神はビール族の女の食べ残しのナツメの実をお食べになったいうのに、俺をムスリムやて決めつけて、そばにも座らせてくれんいうのは、どういうわけや。」

そばに座って聞いていたそのムスリムの人は、頭が混乱してきた。その人は五十過ぎで教養ある人だった。彼もパキスタンの夢を見た。スローガンも唱えた。先頭に立ってチャプラーのサイヤド・アービド・ラザーに靴をなげ

つけもした。ムスリム行動隊の指揮官をしていた事もあった。自分の数々の演説が、繰り返し思い出された。それなりにひとかどの人物だった。演説を始めると大集会場に、喚声かとどろいたものだった。彼は祈りをしなかった。断食もしなかった。酒はたしなんだ。…だが、彼もマホメットの教えを復興させるために立上った。その後パキスタンが建国された。彼は行かなかった。 kongress の党員になったのだ！ 県委員会のメンバーになった。しかし、手織りの木綿を身につけていても心の中では今でもムスリム・リーグ派だった。どんな機会にもとびつこうと待っていた。以前は、パキスタンに行くことも考えた。だが、上から下まで指導者が一人残らずパキスタンに行くのを見ると、決心を変えた。彼は言った。日和見の指導者らのように、ムスリムをヒンドゥーのお情けにゆだねることはできぬ、と。しかし、心の中ではムスリムの指導者になろうと目論んでいたのだ。上の娘二人は嫁がせたあとだった。二人ともパキスタンで幸福に暮していた。三番目の娘は、パキスタンで婿が見つからず、インドでは言うまでもない。

「……もしそちらさんがムスリムの家庭に生れとったら、どうなっとった？ 生れる時誰がどんな権利を持っとるいうのや…」

トーピーの声がきこえていた。

マリクザダー・アブドゥル・ワーヒド・「タマンナー」は、トーピーのこの言葉を頭の中の日記帳に書きとめた。彼は微笑みを浮べた。この若いのは物の言い方を知らん。彼は目を閉じた。目の前に群集がいた；

「お尋ねしたいんやけど。」彼は自分の声に聞き入った。（彼は自分の声が大変気に入っていた。）両手の指をシェールワーニー服の表のポケットに突っ込んだ。「わしがムスリムの家に生まれたんは、わしが悪いんですか？ 自分で家選んで生れてきた、いう人が、この中に居られるんかいな。」彼は言葉を切り、皆の方を見てにやりとした。聴衆は笑い出した。…

「…ご自分はどうなんでっか。」

驚いて声の方を見ると、太鼓腹と視線が合った。

「むろんそうですわ。」彼は即座に答えた。

「どや、きいたか。」太鼓腹がトーピーに言った。

トーピーは当惑した。「大概のムスリムはパキスタンのことが思い切れない訳ですか。」

ああ、そういう事やったのか。

こう思ってタマンナー氏は微笑んだ。

「誰かてパキスタンのことが忘れられんです。昨日までパキスタンは我国の一部やっただと違いますか。人はなんで月を見るんです。そりゃ月が大地の一部分やからでしょう。そう、わしはパキスタンのことが片時も忘れられん。それは連中の愚かさのせいでインドにおけるムスリムが無茶な目におうとるからなんです。」タマンナー氏は、大地と月の喩えに大いに満足し、心の中の日記帳に、この喩えも書き留めた。

太鼓腹のラーラー・ナイナスク・ブラサードはこんな答が返ってくるとは

思っていなかった。と言うのは自分がそんな風にきくと、いつもムスリムは返事に窮するのを見てきたからである。そんな訳で、罨にかからず一人悠然と微笑みを浮かべているそのムスリムを彼はしげしげと見た。

「ムスリムはわたしの仲間や…」ラーラー・ジーが喋り出した。「間違いは誰にでもあるもんや。わしゃ毎日緊張状態がおそろしてなあ。死ぬんは一握りの人やけど、仕事は何ヶ月もお手上げやさかい…。」

トーピーは吐き気がしてきた。隣に座っているムスリムと同様、ラーラー・ジーもきれいごとを言っているのが、トーピーには分っていた。

トーピーは立ち上って用を足しに行った。用を済ませたあと、しばらくの間、窓の外をのぞいていた。どちらを向いても夜だった。四方に暗闇が広がっていた。物音一つ聞こえなかった。列車の窓から遠くの明りが見えていたが、とどまることはなかった。列車は走り続けていたからである。一瞬何かが見えたかと思うと次の瞬間には暗闇がそれを飲み込んだ。トーピーは飽きてきた。四方に広がっている暗闇がトーピーの心に重くのしかかっていた。それから、暗闇のひとかけらがトーピーの目に飛び込んだ。トーピーは目をこすりながら自分の座席の方に歩き出した。

議論は終わっていた。ラーラー・ジーはいびきをかいていた。パンディット・ジーは紅土色のシーツをひっかぶって横になっていた。ムスリムの旅客がパンディット・ジーに足を伸ばすように言ったのだ。彼はトーピーの場所に座ってうつらうつらしていた。

しかし、トーピーを見るなり飛び上った。まるで盗みを働いているところを捕えられたかのようなようだった。

「ええから、座ってって下さい。俺がおたくの席に座るから。」とトーピーが言った。

「しかし…」

「この人を起こすわ。俺ムスリムやないねんからな。」

パンディット・ジーはシーツから顔を出した。

そこでトーピーは、足を縮めてくれるように言った。

「なんでや。自分の席に座っとけや。」こうパンディット・ジーが言った。すると、ムスリムの乗客が「どこかよそこに座りますから。」と口をはさんだ。

トーピーはむしゃくしゃして、「なんでよそこに座りにいかんならん？パキスタンにでもお行きか。」

トーピーの口調が余りにも激しかったのでパンディット・ジーは足を縮めた。トーピーは腰を下ろし、心の中でそのムスリムを罵倒し始めた。

「どちらまで行かれるんで？」とそのムスリムが尋ねた。

「ベナレス。」

「私もです。」

「そりゃ結構。」

「ムスリム大学の学生さんとか。」

「そうです。」

「私もムスリム大学に通てました。モールシン・コート10番に住んでました。」

「今俺の住んどるの、その部屋や。」

これだけで充分だった。二人の間に友情が芽ばえた。アリーガルの話に花が咲いた。それから、何かのことで大声で笑った。ラーラー・ジーは目を覚まし、あわてて、

「どこの駅や。」ときいた。

「駅やありませんよ。」とトーピーが答えた。

「どこまで行っきょんな。」

「家や。」と、トーピーは苦々しい表情をみせて言葉を続けた。「俺の親父は医者なんや。青油のドクター。三人兄弟で、一人はもう身をかためたけど残りの二人はまだや。住所は…。」

「はな、君ビルグー・バーブーの息子さんか。」

「そうやけど。」

「ムンニー・バーブーとバイロー・バーブーはなんでもたお互いに喧嘩しとんのや。」

「互いにせん喧嘩て、どうやってやるねん。」

ラーラー・ジーはこれをきいてふき出した。

「君が選挙戦に立ち上ったらどうなっとったか。」

「パンディットさんが眠っとられるんで立ち上れまへんねん。」

パンディット・ジーは、トーピーの腰までじりじりと伸ばしてきていた足を引っ込めた。

「ドクターはわしと同級やってのう。」

トーピーは歯ざしりした。何か言いたかったが思いとどまった。今頃列車の中で親父の同窓生に出くわすなんて親父さんよ、あんまりやないか。もしラーラー・ジーの口を塞がなければ、ベナレスまで父の話が続くのではないかと思うと、トーピーはぞっとした。しかし、今となっては、青油のドクター・ブリグ・ナーラーヤナの息子でないということもできない。トーピーは仕方なく、ムスリムの旅客の方を見やった。

「インドとパキスタンは絶対戦争をやりよるで。」壁の向うから声がきこえた。隣の客室で政治活動家が話をしていた。「そんな時になってムスリムは報いを受けるんや。」

「パルターヴ大王がアクバルに反逆した時、家来の中にムスリムが何人あったか知っとるか。シヴァージーの手紙は全部ペルシャ語やったんちがうんか。インドとパキスタんが戦争するとしたら、そりゃ宗教どうしの戦争やのうて国どうしの戦争や。」誰かが言った。

「何の戦争にしても、ムスリムはパキスタンに味方しよるわ。」

「パキスタンに住んどるヒンドゥーはどっちの味方すんのや？」こう問いが投げかけられた。「忠誠心を計る秤は二枚しか皿がないねんで、先生。」



辺りがしんと静まりかえった。

「インドに住んどるムスリムはみんなパキスタンの犬や。」

「インドに住んどるもんをパキスタンの犬呼ばわりして恥かしくないのか。頭にチュ・ティヤーをつくったかて、人は神さんになるわけやないんやで。」

「割礼したかて、人は神の使徒にもならん。ここに住まんならんのやったら、ヒンドゥーになって住むほかないやろ。」

「ほなあっちのヒンドゥーはムスリムになって住まんならんいうことやな。」  
前の客室から声がきこえた。「神さん怒ったはんのか。」

「あんた国はどこや。」

「バリヤー県ですねん。出稼ぎに行とったんやが、もう仕事のうなつてなあ。」

「ハリー・オーム、ハリー・オーム……。」と唱えながら、トーピーの側のパンディット・ジーが起き上った。

「インド・パキスタン戦争が終ったんなら、はよ寝とくれやす。」トーピーがそっちをのぞいて言った。

その客室の他の者は、声をあげて笑い、トーピーの前に座っているムスリムは、ほんと安堵のため息をついた

### 13

ひと悶着起こったのは、日暮どきのお茶の時間のことだった。

トーピーが家に着いたときは、兄も弟も会合で話をするために出向いていた。親父さんは店にいた。ラームドゥラーリーは、まずガンジス河で沐浴して来なさい、とトーピーを家から追い出した。トーピーが素直に言うことを聞いたかって？ いやいやとんでもない、彼は友達の家に行ってそこで水を浴びた。蛇口の水も結局ガンジス河の水なのだ。わざわざガンジス河まで出掛けてゆく必要がどこにある？

「候補の誰を応援しに来たんや？」その友達が訊いた。名前をヴィシャンバルと言い、政治にはとんと疎い男だった。「チトラー」に服屋を開いており、その店は祖父から父、父から彼へと受け継がれて来たものだった。政治なんぞにかかわずらったら商売あがったりだ、というのが彼の言い分だった。店主が政治に何の用があらう？ 皮屋もムスリムも地主も、みな彼にとってはお客さまである。お客に愛想のいえん店主じゃどうもならん、という訳だ。選挙のある頃には、店に来る人ごとに票を約束した。ジャナサング派でもあればムスリム・リーグ支持者でもある、といった次第。祖父の代からのムスリムの客が何軒かあったが、そのうちの二軒はパキスタンに移住してしまった。パキスタンなんかできんかったら、今でもあの二軒はうちの客やったのに。これが彼の考える政治というものだった。とはいえ、トーピーに対しては、どの候補者を支援するのか、聞かすにはおれなかった。

「カッランを応援するで。」トーピーは言った。

ヴィシャンバルほど政治に無関心な男でさえもトーピーのこの返事にはと

まどった。

「カッランやて？」

「そうや。」

ヴィシャンバルは、トーピーが冗談を言っているのだと思い、笑った。しかしタ方家で皆がお茶を飲んでいるときこの話がもちあがると、それを真面目に受け取らぬ者はなかった。

「こいつはムスリム大学から来たんやから、そっちの味方するやろな。」  
トーピーの方に目をやりながら、ムンニー・バーブーがバイラヴに言った。

「別にムスリム大学のもんやのうても、仰山俺の運動を手伝ってくれとるわ。」バイラヴが言い返した。「それは一人一人の考え方の問題やろ。俺に政治論議をもちかけん様にしてくれ。ジャナサングやなんて国を後退さしとるだけとちがうんか。」

「お前はお前で二頭の牛にムスリムを犁みたいに括りつけて前に進ませるつもりか。ネルーなんぞは、国ちゅう筏を毀して沈めてしまいよるで。ムスリムは、モーティーラール、いや、サイヤド・ハサンの頃からネルー一家の泣きどころになっとる。」

「そんなこと言うても、女郎屋の提灯じゃ国を照らすにゃ暗すぎるわな。」

ムンニー・バーブーはこれを聞いて肝を冷やした。会議派の連中がマイクでは政治の話をしながら、蔭ではあることないこと色づけしてふれまわっているのは知っていたし、巷ではムンニー・バーブーは議会を女郎屋にしてしまうやろうと囁かれていることも知ってはいたが、まさか弟のバイラヴからそれも面と向って言われようとは予想だにできなかった。

「お父さん、聞いとられます？」

「みんなが聞いとる、兄貴のいま言うた事も、みんなが聞いたわ。」こうトーピーが代わりに答えた。

「俺の言うたことは間違えてない筈や。」

「それはどうか知らんけど、兎に角、バイラヴの言うとおったことは絶対おうとる。ジャナサング（大衆連盟）とは名前ばかりで、どの村に行ったかて事務所ひとつあらへんのや。ジャナサング改め商人サングとでもした方がよかったんとちがうか、兄貴。」

「ほな、お前はバイラヴの応援にはるばるお出ましになった、いうわけやな。」とムンニー・バーブーが言った。

「どういたしまして。俺はカッランの選挙運動しに来たんや。」

「あの、ムスリムの？」ムンニー・バーブーとバイラヴは口を揃えて聞き返した。

「バイラヴよ、ヒンドゥーもムスリムもない筈やろ。お前は、世俗主義か社会主義かを問題にしたんちゃうんか。公認候補になった途端、会議派におなりか。」

「こりゃまあどがあにしたことかのう、兄弟を敵にまわしてムスリム奴の応援しよういうんか。」ラームドゥラーリーはおろおろした。「ほんじゃけ

わしはこれをアリーガルジャのいう所に行かしとうなかつたんじゃ。」

その夜、ラームドゥラーリーは寝ようにも寝つかれなかった。血を分けた兄弟がどうして敵味方になって争えるのか、それもムスリムなんぞのために？彼女にはどうしても得心がゆかなかった。

ラームドゥラーリーに政治は分らなかった。ムスリムを憎んでいた訳でもない。パキスタンとかいう国ができたことは、うすうす聞いて知ってはいた。しかしヒンディー語の新聞を読むと、何やら国境の向うではムスリムがヒンドゥーにひどい仕打ちをしているらしい。それで彼女はムスリムを恐れた。だからトーピーがアリーガルに行くのに反対したのである。だが正に心配していたことが起こってしまった。トーピーがムスリムの仲間になってしまったのだ。一方、ムンニー・バーブーとバイラヴとの反目にも老母は心を痛めていた。ところがトーピーときたら全てを滅茶苦茶にしてしまった。暗黒時代に起こらぬことは少ない。ムンニー・バーブーとバイラヴのどちらがアルジュナでどちらがドゥルヨーダナか、見分けもつかぬ内に、バルバッドラがやって来た。このバルバッドラとは何だ？

トーピー自身、脳裏に政治の明確なイメージができていた訳ではなかった。トーピーがこのように変わったのは、単に政治意識によらない。トーピーの変貌にはその少年期がものを言っている。昔、彼の着るものはいつもムンニー・バーブーのお下がりだったし、弟が駄駄をこねればいつも譲ってすごしてきた。その頃は、兄と弟とを憎んでいることに気付かずにいただけだ。それでも、一体何故カッランなのだろう。どこからカッランなどが入り込んできたのだろう。学生連盟に参加するようになって、共産主義の考え方には諸手をあげて賛同することができなかった。幾つかの点でその考え方に疑問をもった。党员になって後も相変らずあれやこれやと反撥し続けた。トーピーが腹に据えかねたのは、党が大戦時はイギリスに、パキスタン問題の際はムスリム・リーグ側についたことだった。それでもカッランなど、どこから入って来たのか？トーピーがベナレスに来なければ誰も予想だにしなかった。しかし彼はベナレスに来た。何故来たのか？心の底のどこかで、サキーナーがラーキーを結んでくれなかったことを気にし続けていたのだ。ラーキーのことがあったからこそ、今までサリーマーに愛を打ち明けることができなかった。すぐそばには、キシャン・シンとシーマー、ライース博士とシャクティといった異教徒同志のカップルがいるにはいた。それでも、サリーマーに好意を伝えるのがトーピーは怖かった。

サリーマーはシャーハジャハンプルのパタン族の娘で、肌は小麦色、黒くつぶらな瞳をしていた。アリーガルに来たばかりの頃、ヒンドゥーには鼻も引っかけぬ風だった。そしてアリーガルに来てからまず知ったのが、サキーナーとトーピーの許し難い仲のことで、そうするとこの二人を見れば虫酸が走った。

ある日ヒンディー学部集まりでトーピーが論文を読んだ。サリーマーはすかさず反論した。ヒンディー語はヒンドゥーの使う言葉である、それだけ

らヒンドゥーの言葉をそのまま国の言葉とするわけにはいかない、と。

「…ウルドゥー語はどこやらの講師の奥さんみたいに、誰かにひっかけられたりせえへん。…」

トーピーの黒い顔が真っ赤になった。

その発言に大学中が仰天し、アブドゥッラー・ホールから V・M・ホールまで、しんと静まりかえってしまった。

この物語を始めたのは丁度この頃の話からである。トーピーが、イッファーンに、誰かムスリムの恋人がほしいと洩らしたのもこの頃のことだ。その時トーピーの胸中にサリーマーの面影は全くなかった。だがのちになって思い返してみると、そう言い切れるかどうか覚束ないのだった。

一年、二年、三年、そして四年が過ぎた。トーピーが何を言ってもサリーマーは反対し、サリーマーが何か言えばトーピーが茶化した。しまいには、二人の名前はペアで呼ばれるようになった。トーピーのサリーマー、サリーマーのトーピーという具合に。

サリーマーのことを、今頃になってなんで持ち出すのだ、と語り手にたずねないでいただきたい。サリーマーを登場させるのはここより他にないのである。私は皆さんにトーピーとサリーマーのロマンスをお話しているのではない。サリーマーに登場してもらわぬことには話が進まないところまで来たのだ。そうでなければわざわざサリーマーを持ち出したりしない。一体、主人公の全てをことごとく呈示するのが語り手の義務である訳はない。人生の全てなど、退屈至極なものである。語り手はその退屈な部分は切って取ってしまう。それが出来ぬようでは語り手ではない。語りのこつは如何に聞かせるかでなく、如何に聞かせないか、という点にある。但し、それは語り手が登場人物のすべてを知っていてこそ可能だ。私はトーピーの一切を知っている。だからこそここまできて初めてサリーマーを登場させるのである。もし最初から彼女を出しておれば読者はこれを、よくある恋愛もので、サリーマーがヒロインなんだな、とお受け取りになり、私がヒンドゥー青年とムスリム娘の恋を描いて、民族融和に手をかしている、とお考えになり、満足なさったり、なさらなかったりするだろう。しかし、恋愛させても民族融和などおこらぬことを私は知っている。もしそうなら、プレームチャンドの『行動の広場』の結末も違ったものになっただろう。

だからもう一度念を押せば、この小説は、トーピーのロマンスではなく、トーピーの人生の物語である。サリーマーがヒロインだという思い込みをなさらぬようご忠告申し上げます。

それはそれとして、事の次第を話そう。サキーナーとトーピーのことは、大学だけにとどまらなかった。休暇になると学生たちは郷里に戻る。休暇以外の時は金送れ、の手紙を出す。それで学生や手紙と一緒に、人の噂もまた旅をするのである。

トーピーがムスリムの講師の妻君のサキーナーに参っているという噂を最初に聞いたのは、ムンニー・バーブーだった。彼は誰をおいてもまずムスリ

ムの商売女のところに相談に行った。ムンニー・バーブーとムスリムの商売女とは、どういう取り合わせだ、と詰問なさらないでほしい。私も始めは大いに困ったのであるが、ダールマンディー通りの雑然としたバーザールに立っている沢山のヒンドゥーの商売女よりは、同じ商売女でもムスリム女の方がムンニー・バーブーには気易かったのなら、そう語るより他、ないではないか。

「で、何か都合悪いことでもあるん？」その女が言った。「うちかてムスリムや。お袋さんはつい前の年、メッカに巡礼して来たしな。」

「その人は商売女やないんや。」

「あんたも阿呆やな。」女は笑った。「どれがそうで、どれがそうでないか、なんで分るのや。こんなバーザールで会わなかったら、あんた、うちを商売女やと思うか。うちの額に書いたあるか。わたし客とり女でございますいうて？」

「いや、けど…」

「弟さんもムスリムと結婚させたりいな、あんたかてムンニーバーイーから引きはなすために結婚させられたんやろ。」

「ほんに、今どこにおるのやろな。」

「あの子やったら、ガージーブルのムスリムの旦那のお妾さんにおさまったで。」

「何やて？」ムンニー・バーブーは飛び上がるほど驚いた。「ムンニーバーイーがムスリムの旦那に囲われてるやて？」

「そうや。」

「そんなこと、あるはずない。」

「なんでえ。」

「あれはムスリムになってもたんか。」

「妾になるんに、ムスリムにならなあかんで、いつだれが決めたん？」

ムンニー・バーブーは、ムンニーバーイーへの憤懣をトーピーに向けた。そういう噂話を聞いた手紙を親父のドクトルに見せた。ところがドクトル氏は眉ひとつ動かさぬ。もしサキーナーが人妻でなかったら心配もしたろうが。しかし数日後、同じ趣旨の手紙をバイラヴが見せると、親父さんは少し顔をくもらせ、ついにある晩、ラームドゥラーリーまでそれを口にすると、とうとう考え込んでしまった。そしてトーピーを相応以下の相手でもいいから結婚させることに肚を決めた。

定年退職した警察署長のバールクリシュナの一人娘には、まだ婿さんが見つからずにいたので、丁度よい、ということになった。全く偶然ながら、この時トーピーがカッランの選挙運動のために帰ってきたのだった。

「お前は、兄弟を敵にして選挙やりに来よったんか。」ドクトル氏が尋ねた。

「そうです。」

「恥かしいとは思わんのか。」

「兄貴や弟でも、選挙やるんに恥なんか感じてないのに、なんで僕が。」

「お前、共産党員になったそうやな。」

「はい。」

「サキーナーちゅうんはどういう女や。」

トーピーは口をつぐみ、父の目を正視した。

「僕とは関係ありません。」

「ええから誰や。」

「幼な友達の嫁さんですよ。」

「それでも…」

「お父さん僕は…」トーピーはドクトル氏の言葉をさえぎろうとした。

「わしゃ、パールクリシュナ・ラーイの娘さんとお前の話を決めてきた。」

ドクトル氏の方がトーピーの言葉を遮った。

「お断わりします。」

自分の家でこんな物の言い方をされようとは。ドクトル氏の雷が落ちた。

「ならとっととこの家から出てけ！」

トーピーも負けずに言った、「ヒンドゥーに生れたら男子は家における権利があるもんや。けどな、人を踏みつけにした上に、姉さんと思とるひととの仲をあやしまれたりした、こんな家にはもう住みとうないわ。」

トーピーはこう言い捨てて部屋を出た。昼間は、トーピーがどこにいるか誰も気にとめなかったが、夜になっても帰って来ないので、母親のラームドゥラーリーは心配しはじめた。それでドクトル氏も、トーピーを家から追い出したことを白状した。

「お、追い出したゆうて？」ラームドゥラーリーの声はかすれた。

「そうや。」

「ああ、情けない。」

その時トーピーは駅の待合室に坐ってサリーマーに手紙を書いていた。

…そうしたければ、この手紙をムマターズさんに見せればいい、そしてムマターズさんの意向によっては退学処分にしても構わない。それでも今、どうしても言いたいことがある。僕は君があんまり怖いんで君から遠く離れてはおれないのだ。結婚はできないもんだろうか。私はムスリム、あんたはヒンドゥー、と君は言うかも知れない。子供はさぞかしおかしなのができるだろう。しかし、子供の事は子供自身に任す、という訳にはいかないだろうか。今日父から、家を出てゆけと言われた。父も僕とサキーナーの仲を疑っているのだ。…

トーピーはこの手紙を数遍読み返した。そして結局破って棄てた。とても出せるものではなかった。こんな手紙は三文小説にでてくる様なものだ。実生活には、こんな手紙の出てくる余地などないことが、彼には分っていた。それでも、胸のつかえはとれた。このことが数年来心に重くのしかかっていたのだ。トーピーは横になり、サリーマーのことを思い始めた。

翌朝起きると、お茶を飲んだ。茶が夕べの疲れをとってくれたので、これからの身のふり方を考えた。一生駅の待合室で暮らす訳にはいかない。

トーピーは、真直ぐカッランの家に行った。カッランは白い歯を見せて彼

を迎えた。

「選挙まで居候さしてくれな。」

「ここに？」カッランは驚いた。

「ふん、親父に家追い出されてしもてな。」

ドクトル氏も、ムンニー・バーブーも、バイラヴも、トーピーがまさか勘当されたと大っぴらに言おうとは思ひもしなかった。…

語り手の私としては、トーピー物語を退屈なものにしたいくない。大概主人公というものはいいセリフばかりいうものだから、トーピーも口達者であって然るべきだった。ところが生憎トーピーはひどい口下手なのだ。だから選挙の事について詳しく話すのは止しにしましょう。カッランが勝とうがムンニー・バーブーが勝とうが、読者や私の知ったことではない。トーピーの人生においてもこの選挙はさして意味をもたない。が、家から追い出されたことは、すこぶる重要な事件だ。トーピーはイッファンにこう便りをかいた。

…君の先祖のアダムは、楽園を追われたときどんなに幸福だったろう、今初めて僕はそれが分った。楽園も、僕の親父の家同様、退屈なところだったんじゃないだろうか。その上、僕の家の場合、君の奥さんと仲良くするにも親父のうるしをもらわんならんのだからな。でも今は、家なき子になってしまった。仕事と家と女房の世話を至急頼む。…

「許しをうるし、いうて書いとるけど、この手紙は検討に値するな。」

「あの黒んぼと出来たかて、うちはなあもかまへんゆうたら、頑固親父の何やらナラーエン・シュクラ氏、何か文句あるんやろか。」サキーナーが言った。

イッファンは返事をしなかった。

「パパ、トーピーのおじちゃんの家どこなん？」シャブナムが言うと、

「今日から、ここになるんや。」

「あんなヒンドゥーにうちの食器で食事なんかさせられへんわ。」サキーナーが目をむいた。「それにしてもティーカップひとセット用意せんなんのとちがうやろか…。」

会話がそこで終った。シャブナムは絨毯に寝ころがって、トーピーの似顔絵をかきはじめた。イッファンは新聞を読み始め、サキーナーは台所に立った。

## 14

アリーガルに戻ってくると、待っていたのは、サリーマーが結婚したという知らせだった。シャブナムがそれを教えてくれた。駅から一直線にイッファンの家まで行くと、シャブナムの他誰も居なかった。イッファンは講義に出たあとで、サキーナーは近所に行っていた。

「トーピーのおっちゃん、おもしろかってんで。」シャブナムが言った。

「何が？」

「サリーマーおばさんが結婚しはってん。」

「それのどこがおもしろいんや？」

「うちらも行くところやったのに、汽車が出てしもてん。」シャブナムは笑った。

トーピーには気を落とす権利がなかった。それだから台所に行き、お茶の仕度を始めた。シャブナムも後について台所にやって来た。

「おっちゃん、たいくつやわあ」

「なんやて？」トーピーは驚いて聞き返した。

「たいくつ。」

「シャブナムも退屈する年頃になったんか。」

「ほやかて。みなたいくつしとるやん。ほんでたいくつて何やの。」

「退屈は退屈や。」

「うちのお母ちゃん、おっちゃんにセーター編んだげたで。」

「どんなん？」

「ごつつういかしてるよ。おっちゃん、おっちゃんはヒンドゥーやろ？」

「なんで。」

「きのう、シャーヘーダーおばちゃんところに行ったら、おばちゃんが、マフムダーのおばちゃんにヒンドゥーの悪口言うてるねん。ほんでうちが、そんなことあらへん、トーピーのおっちゃん、ヒンドゥーやけどええ人や、て言うたら、二人ともえらい笑うねん。ほんで、シャーヘーダーおばちゃんが言うん—お母さんの気に入るとるのに、子供の気に入らん筈ないわな、やて。うちのお母ちゃんおっちゃんのこと気に入るとるん？」

「サリーマーさんの結婚式はいつやったて？」

「おとつい。」

「あんたいつ来たん？」家に戻るやサキーナーは声をあげた。

「ちょっと前。今、シャブナムにいろいろ聞いとるところや。」

「ほんまにドクトル何やらかんやらシュクラーさんに追い出されたわけ？」

「ドクトル何やらかんやらやない、青油のドクトル・ブリグ・ナーラーヤナ・シュクラー。」

「やろ。」

「やろ、やない、そうなんや。」トーピーが言った。「俺に参ってしもたからいうて、親父の名前まで変ちくりんにせんとってくれ。」

「自分の顔、見たことあるの？」サキーナーは言い返した。

「毎日見とる。」

「うちがそんなに惹かれたりしますかいな。」

「世間じゃそう言うとる。」トーピーは言った。「シャブナムが言うには、サリーマーが結婚したそうやね。」

「そうや。」

「やっとムスリムの娘を好きになったいうのに相手はとたんに嫁いでしもた。」

「イッファンがあんた名義で就職依頼状を出したで。」



「どっかええ娘の親父さんのところに？」

「さあ、それはどうか知らんけど。」サキーナーが答えた。「とにかく、うちの大学の事務局長らしいわ。」

「俺ら二人の仲が怪しまれとる限り俺は講師にゃなれんし、兄貴も助教授になられへんのや。もうここできっぱりさいならしよかと思うとる。」

サキーナーの顔は一瞬こわばった。それはトープーでない、誰かよその人の声のようだった。

「阿呆なこと言わんとって。」

「阿呆なことなんか言うとらん。俺ら二人やイッファンのことが心配なんと違うんや。ただこのシャブナムの…。」

「ただもへったくれもない、娘のことなんか気にせんでええ。」

「いつまでもごまかしてばかりはおられへんで、なんで俺にラーキーを結んでくれんのや。」

「ここのらのムスリム学者にびくついて？ここのらのジャミーラー、アニーサー、クダシャーなんかのムスリムの姉さん方の口がこわあて？ここのらのいくじなしのコミュニスト連がおそろしいて？うちはヒンドゥーにはラーキーを結ぶことはできんのや。あんた、親父さんの青油売りのドクトル何やらかんやらに追い出されたんやろ、うちの人があんたのために一部屋空けてくれた、勇気あったら、うちらと一緒に住んだら。」

トープーの返事も聞かずに、サキーナーは自分の部屋に駆け込んだ。泣き出したかったが、トープーやシャブナムの前で泣くのは嫌だった。ラメーシュのことが思われてならぬ。彼から来た手紙が一通、枕の下に入れてあった。サキーナーはそれを読み返した。

…サクちゃん元気か。僕はいま戦場だ。何が起こるやら見当もつかない。雪がいつともなく降り続いている。君のラーキーがないので僕はとても孤独だ。サクちゃん、君はどうしてそんなに変わってしまったんだ。…

ふた月前に書かれたその手紙は、この二日前に届いた。そして正にその新聞に、陸軍大佐ラメーシュがラッダーク戦線で戦死したとの悲報が載っていた。サキーナーはその記事を見ると、箱の中にしまっていたラーキーを数えずにはいられなかった。それで時間をくってしまい、汽車に乗り遅れ、サリーマーの結婚式に出席できなかったのである。箱の中にラーキーが山のように眠っていること、それを残してはとても結婚式に出掛けられなかったということは、イッファンにすら話さなかった。今またトープーが、なぜラーキーを結んでくれないのかと迫っている。

箱から 14 本のラーキーを取り出し、ひとつひとつをいとおしみながら、また元に戻すのだった。

「姉さん。」トープーがドアのところから声をかけた。

「なに？」

「なにしとるんや？」

「考え事や。」

「何の？」

「お月さんみたいに大切な旦那を忘れて、あんたに引っかかったなんて、あんたに、一体何を見たんやろうか。いうことや…。」

「お月さんはひげなんかはやしとらへんけど。」帰って来たイッファンが部屋に入りながら言った。

「トーピー、この神のしもべときたら、おとついかからどうかしとるんや、坐り込んだまま無言の行や。」

しかし、サキーナーは自分の悲しみを誰にも打ち明けまいと心に決めていた。その悲しみというのがまた、人には容易に理解できぬ悲しみであった。彼女がヒンドゥーを憎んでいることは皆知っていたが、彼女の箱の中に 14 本のラーキーがぎっしりつまっている事は誰一人知らない。一体、本当のサキーナーはどちらなのか。皆の知っている憎しみの方か、それとも人知れず秘めてある 14 本のラーキーの方か。虚と実とを区別するのは、そう易しいことではない。サキーナー自身にも、憎しみとラーキーと、そのどちらかにせものなのか、多分、分ってはいなかったろう。

「国民の統合の問題について今日、イルファーン・ハビーブが講演するし、イクティダール・アラム・カーンも、なんかびっくりする様なことを発表するらしいで。」イッファンがトーピーに言った。

「あのカーンいう男は人を驚かせるんがうまいねん。」トーピーが答えた。

「誰が講演したかて、それで国民の統合なんか出来るわけない。」サキーナーが口をはさんだ。「そんなことができたとしても、みんなせいぜいアーレー・アフマド・スルールカラビンドラ・ブラマルみたいになるだけや。それより、うちは、ふつうのコミュナルなヒンドゥーやムスリムの方がずっと好きやわ。」

「なんか口をあけたらすぐひねくれたこと言うんやから。」トーピーがからかった。

「どこがひねくれてるん？」サキーナーはいきりたった。「スルールさんはサティーシュ教授に対抗してカリーク・ニザーミーを教授にするために全イスラミ共闘を張ったんやなかった？そのカリーク・ニザーミーをこの貴族のコミュニストまでが、イルファーン・ハビーブの代わりに教授に推したんやなかった？この大学はご都合主義の人ばかりや。そのうち、ドーン・ウィメンズ・カレッジの校長におなりやで。ほんであんたは…」彼女はイッファンに目をやった。「あんたは、ヒラの教官で終るのがおちやろね。ここにはマジュヌーン・ゴーラクポリーの居るところがない。カージャー・マスウッド・アリー・ゾーキーばかりが出世するのや。このお国はアブラール・ムストファー、ジャズビー、ブラマル、それにヌールル・ハサンみたいな人らの国や。ここにはトーピーやイッファンみたいな人らは生まれへん。金持ち連中に女の子を世話するお姉さんたちは、うちとトーピーができとるいうし、そんなこと言うといてすぐ誰か娘の中絶手術の話やなんかしだすのや。ここに居たら息が詰まる、もうこんなとこ居りとないわ。」

イッファンとトーピーはサキーナーを茫然として見守り、サキーナーは泣きくずれた。

「そやから言うてんのか、俺にラーキー結んでくれいうて…。」

「なんでそんなこと。」サキーナーの声は悲鳴に近かった。「うちはそのへんの女とはちがうのか、うちがラーキーを結んだげた人は皆死んでしまう…。」

「誰が死んだんや？」イッファンが驚いてたずねた。

「別に…。」

「けど。」トーピーが口をひらいた。

「あるヒンドゥーが死んだんや。」

サキーナーは気が狂ったように泣いた。枕元に腰を下したイッファンは髪をやさしくなでた。トーピーは、同じ部屋にいる自分が余計者のように思えた。サキーナーに触れることは出来なかった。そこに立っているのも耐え難かった。鏡台の上の小物を一列に並べはじめた。しかしそれも一分足らずで終ってしまった。サキーナーはまだ泣き続け、イッファンは髪を撫でている。二人を残してトーピーは外に出た。シャブナムがベッドに寝ころんで何やら口ずさんでいた。

ジャック・アンド・ジル

ウエント・アップ・ザ・ヒル…

トーピーはジャックのお話の相手をさせられなくなかった。つかまると、いつも、何故ジャックが丘に登ったか、その訳を話してやらねばならない。シャブナムはそれに何だかんだ言い返して、とりとめもなく時間が過ぎていくのだった。

ところがジャックとジル先生は目ざとくトーピーを見つけてきいた。「誰が死にはったて？」しかしトーピーは答えなかった。暗い気持ちだった。サキーナーのヒンドゥー憎悪が本心でないことは分っていた。だからサキーナーがラーキーを結んでくれなくても心は左程痛まなかった。しかしサキーナーが泣いている事がトーピーには苦痛だったのである。

バハードルの煙草屋はいつもの様に賑っていたが、バーザールにはパーン煙草以外、もう誰もが買えるようなものは残っていなかった。煙草屋の他は寝静まったようだ。ティー・コーナーや二人掛け椅子で学生が数人、セイロン放送を聞いていた。おっさんの店では「写真館」のポスターが大層淋し気に目に映った。アミーンがいつもの様に誰かのひげを剃っていた。そのおしゃべりも聞こえるようだった。——アユーブ大統領ときたら、ひげを剃ってもらうのが飯よりも好きな人でしたわ。或いは、——大守の坊ちゃんのリアーカト・アリーカーンが四日も姿を見せないのでどげんにしたか思うちよったら、結婚式に出ておられたんじゃないや。はあ、のどかな時代やったもんや。…

何も変わっていなかった。ヌールル・フサン教授宅の前に立っている乗馬クラブの看板が所在なげに馬車馬の落としていった糞の臭いを嗅いでいるように見えた。靴屋が、すり切れたサンダル古いつぎの上に新しいつぎをあてていた。…

変わらぬいつもの風景だった。

トーピーの側を、彼女の話をしてしながら学生達が通り過ぎて行った。と、一団の学生が一人の学生に言葉の雨を浴びせた。その学生は俯いて通り過ぎた。

ラフマト・カフュの前で、学生間にひと騒動おこった。ナイフがかざされた。一人のタイ人学生が、別の学生の鼻をへし折った。かけつけた学生課長は、そのタイ人学生には見向きもせず、負傷した者の名前と住所だけをひかえて立ち去った。

トラックが一台、道端の頭のおかしな女の子をひいて走り過ぎた。オール・インディア放送がニュースを流し始めた。

「親父さんに追い出されたってなあ。」突然トーピーの肩に手をやって誰かが話しかけてきた。

「ああ。」答えて振り向くと、やくざの兄さんだった。

「のう、いつかわいにもサキーナーを紹介してんか。」

面と向かってサキーナーの名がこんなに無遠慮に出されたのは初めてだった。トーピーはむっとした。

そばを通してゆく学生らがどっと笑った。その兄ちゃんの言葉を聞いたからではなくて、自分達のことで笑ったのだった。しかしトーピーには自分が笑い者にされている様に思えた。そうすると、バーザール全体が自分を笑い始めた。映画館のポスターも、乗馬クラブの看板までもが嘲笑の声をあげはじめた。

「うるさいっ！」たまらずトーピーが叫んだ。

周囲のさざめきがやんだ。

シャムシャード市場の息が止まった。皆の顔色が青ざめた。バハードルはあわててパーンをこしらえ出し、サイヤド・ハビーズは客と話を始め、その辺りに居た学生たちは茶屋に入ってしまった。トーピーは喉の渇きを覚えた。心臓の動悸が激しくなった。

「なんやてえ。」目をまともに見据えて自分に“うるさい”などと言える奴がいる、ということに内心ひやりとしながらやくざは言った。人混みのバーザールで裸にむかれたような気分だった。「よう言うたな。」やくざはもう一度すごんだ。

トーピーはしかしそこをびくともしない。

（こいつなんで逃げよらんのか？）やくざは心中つぶやいた。

そのあとのことはいちいち説明するには及ばない。意識を取り戻したときトーピーは病院のベッドにいた、といえは十分である。身体にはナイフでやられた傷痕があった。しかし学生課長はシャムシャード市場で目撃者を見つけられず、犯人は分らずじまいだった。

カトプラーの向う側で集会が開かれ出した。カレッジがストを始めた。人々は急ぎ足で帰路についた。…

暴動が突発した。その波は西 UP 州全域に広まった。メーラトで、シャージャハーンプルで、バレーリーで、ハートラスで、クルジャーで…死体があ

ちらにも、こちらにも…。

死体。

何というおぞましい言葉だろう。人が己れの死を、自宅で子供らに囲まれて迎えるときも、その、魂の抜けた身体は死体と呼ばれる。他方、路上で暴徒の手にかかって殺されてもその魂の抜け殻は、やはり死体としか呼ばれない。言葉とはこんなにも貧しいものなのか。なんと言葉が横着をしている時代だろう。恥ずべきことではないか、家で静かに天寿を全うする者と暴動で殺される者とを区別する言葉がないとは。屋根の下では一人の人が死ぬだけだが、暴動の犠牲となれば死ぬのは人ばかりではない、伝統が死ぬ、文明が、歴史が死ぬのだ。カピールのラームの嫁が死に、ジャーイシーのパドマーワティーが死に、クトゥパンのムリガーワティが死に、スールのラーダーが死ぬ。ワーリスのヒールが死に、トゥルシーのラームが死に、アニースのフサインが死ぬ。この死体の山を目で見る者がいるわけではない。数え上げているだけだ。七人が死んだ。十四軒の店が略奪にあった。十軒の家に火がつけられた。まるで家だの店だの人間だのがただの言葉にすぎなくて、辞書から抜き出して現実の中に放り出してやったといわんばかりに、……

なんでこんな演説をきかされるんやろうなどと、考え始めないでほしい。済まないと思っている。だが私は政治の指導者などでは毛頭ないし、演説などせずとも、言いたいことは、たくさんある。それもトーピーが言ってくれた。ごくふつうに言ってくれた。発音の間違いもせずに言ってくれた。

新聞・ラジオ・政治家・それに全てのヒンドゥーとムスリムが、暴動について論じ始めた。トーピーが入院しており、瀕死の状態にあることを誰も思い出さなかった。ただサキーナーだけは彼のことを忘れなかった。彼女は毎日見舞いに來た。患者たちも、医者も、使用人も掃除人も車引きも、教授も講師も、また彼らの奥方も正妻連中も、みなが驚きの目で彼女を見た。だがサキーナーは胸をはって来院し、悪びれることなくトーピーの傍らに坐り、そして堂々と帰って行った。

トーピーも暴動についてさかんに論じた。飽き飽きしたシャブナムが外に遊びに行行って戻って来てもまだ彼の＜演説＞は続いていた。

「暴動いうんは局地的現象のことやて、それがなんで分らんのか。ジャムシェドプル暴動のとき、アリーガルにおいても別に眠れんほどやなかったやろ？」

「うちのことはほっといて。眠れんのはいつものことや。」

「なんで？」

「ラーキーが蛇みたいに体に巻きつくのや。」

「ラーキーが？」

「そう。」

「頭がおかしくなったんとかがうか。」トーピーは笑った。

「笑たらあかん。先生は笑うのはようないて、言うてはった。」

「そりゃひどい。ドクターの連中、笑うことまでやめさせよるんか。この

国において、笑えるところなんかありませんのにな。」

「あんたいうたら、何でもかでも政治の話にしてしまうんやね。なんで？」

「スローガン叫んだり、演説したりするんが面白いからや。」

「イッファンがひげを剃り落としたん知っとる？」

「ええ？いつ、なんで？今度いつ生やすんや？」

「知らんわ。」

そもそもひげを伸ばし始めた訳、そしてのばしたからには、そのままにしておけばよいものを剃ってしまった訳は、イッファン本人にもよく分らずにいた。暴動が始まると、彼は気が滅入ってならなかった。そしてある日、イッファンがバーザールからひげそりセットを買って来たのをサキーナーは見た。が、サキーナーは何も尋ねなかった。

「はな、俺にもそのひげそり顔を見せてもらわなあかんな。」

「あの人は今デリーや。」

「何しに？」

「辞表を出してん。」

「まさか。兄貴がそんな憶病もんとは思わなんだ。」トーピーは泣き出した。「俺をほって、何も言わんとデリーに行ってもた。…」

「もう、ここに居られん様になったんや、トーピー。」

「なんで。」

「みな分つとるくせに、知らんふりかいな。」

「ほんなら、なんでここに来るんや。」

「いやや言うならもう来いへんわ。」

そういうとサキーナーは、トーピーが言葉を返す間もなく出て行った。トーピーは子供のように枕に顔を埋めて泣き始めた。

トーピーは、サキーナーとイッファンに憤慨していたので、夕方サキーナーがまた見舞に来た時も口をきかなかった。サキーナーも黙りこくっていた。

「またなんで来たんや。」とうとう、苛々してトーピーが口火を切った。「ふいと出ていったくせして。」

「うちはあんたの女中か。あんたにいちいちきいて出入りせんならんの？」サキーナーはカッとして言い出した。「自分を何様や思てんの。そんなこと聞ける立場やの。少しは頭を冷し。それ以上阿呆にならんようにな。」

トーピーは呆然としていた。

## 15

イッファンの退職願は受理された。それを認めようとしなのがトーピーである。

「そういうけどな、トーピー、お前が入院しとる間僕はほんまに孤独やった。僕らは一人じゃあ生きていけん。サキーナーの受ける侮辱ていどは我慢できた。そやけど暴動のことの起こりが他でもないこのサキーナーやという事実は僕もサキーナーも忘れることができんのや。」

「ちゅまらんこと言うな。」トーピーはこう言ってイッファンとサキーナーの方を見た。トーピーは、どちらかがきつと、ちゅまらんやのうてつまらんや、ととがめてくれるだろうと信じていた。そうすれば万事片がつくのだ。しかし、とがめてくれる者はなかった。トーピーは失望した。人生が虚ろになってしまったようだった。

「こん畜生、自分がムスリムやいうことを忘れたらあかんで、俺に仕事が見つからんのになんでお前に見つかる筈がある。」トーピーは息巻いた。

「おっちゃん汚ない言葉つこうとる。」シャブナムが口を出す。

「こん畜生が汚ない言葉って誰がおしえた？」

トーピーは尋ね返したが、「なあトーピー。」とイッファンがさえぎる。

「そうカッカしたかてどうにもならへん。」

「それで、パキスタンに行くつもりなんか。」

「いや、パキスタンなんか、なんで行ける。ムハッラム月（イスラム暦第一番目の月）にはフサイン大師がヒンドゥスタンへおいでになる。今年は是非ともお会いして尋ねてみるつもりや、真なることを語るべしいう罰をいつまで受けんならんのか。」

「嘘をついとる限りずっとや。」とトーピーが答えた。「俺、明日面接試験を受けに行く。」

「何処に？」

「バライチュにある、サナータン・ダルム・ディグリー大学にや。」

「なんで行くのん、通る筈ないのに。」とサキーナー。

「俺は暴動のヒーローやで。ヒンディー語新聞に目も通しとらん。俺の顔写真がでかでかと載っとる。親父さんから手紙がきて、勘当は撤回してくれるそうやし、どっかごっつい家の娘さんとの結婚話が進行しとるんやそうや。将来の義父の約束によりゃ、デリーで立派な仕事と、大型の自家用車、それにちょっとした住まいと多額の銀行預金もらえるんやとき。」

「即、結婚なさい。」サキーナーが言う。

シャブナムは、「トーピーのおっちゃん、その車に乗してな。」とねだる。

「よしよし、おまえを車に乗つけるためにゃ、俺はいよいよ結婚するしかないわ。」

「なら、はよ行って、ショーパーとプリーに話してこうか？」

「何を。」

しかしシャブナムは友達に、おじさんのトーピーが高級車を持つことを言いふらしに飛んで行ってしまった。

「子供いうもんは、ちょっとしたことではさぐんやなあ。」

「はさぐやない、はしゃぐや。」サキーナーが口を開いた。

トーピーは生き返った心地がした。

その日トーピーはドクトルの親父さんに、大型の車など必要ありませんと手紙を書いて送ったが、サキーナーやイッファンには、そのことを知らせなかった。

手紙をこっそりポストに入れてトーピーは列車に乗り込んだ。往路中ずっと面接のことばかり考えていた。文学史を頭の中でさらってみた。文学上の諸問題について再検討してみた。そうして、面接室に足を踏み入れた時には準備万端整っており、かつ、就職できぬことも分っていた。

最初の質問が来た。「そちらの大学じゃあよう暴動が起こるが、一体何んですか。」

「文学はどうなったんや？」

「文学史は！」

「文学の諸問題は！」

「そんな大学は閉鎖してしまうべきやね。」別の面接官が言った。

「文学の伝統は！」

「技巧の伝承は！」

「君はラスカーンをヒンドゥーと考えるかね。それともムスリムと？」質問が出た。

「私はジャーイーシーもヒンドゥーやと思うてます。ガーリブやミールにしても同じです。」とトーピーは答えた。

「そこんところを詳しく頼みますわ。」

「ガーリブは偶像崇拝をしていました。大体ウルドゥー詩というのが偶像崇拝するもんなんです。ミールはティラクを額につけとったくらいですし、額に線を引き寺に坐って、イスラムを信じとったなんていつのことやら。」

「そういう観点からは今まで考えられたことがないがねえ。」

「今からでも遅うはないでしょう。」

面接は終わった。

トーピーはアリーガルに戻って来た。

「どうやった？」サキーナーが尋ねた。

「ガーリブがシーア派かスンニ派か、とか、ラスカーンがヒンドゥーかムスリムか、とか、そんなことが大学で大真面目に考えられとるような国で教職になんぞ誰がつくか。」

「そんならどうするつもりや。」イッファンが訊く。

「映画の主題歌でも作詩する。靴みがきをやる。乞食もする。どこかお偉方の一人娘と結婚してのらくらする。何でも出来るやないか。」

「それで見込みはあるんか？」

「他の二人の方が余程向いとった。」

「全部で何人やったんや？」とイッファン。

「三人。」

「なら採用されるわ。」とサキーナーは身を乗り出すのだが、

「もし採用なんかされたら自殺や。」とトーピー。

「もしやよしやの話は結構や。」サキーナーが言う。

ここでイッファンが、「ジャンムーで仕事が見つかったんや。」と言った。

「どんな仕事や。」



「歴史の教師や。」

「K・M・ムンシーの歴史か、カリーク・ニザーミーのか。」

「ハビーブ教授やターラーチャンド博士の名前をなんで出さん？」

「今どきそんなのを引き合いに出せるか。」トーピーは笑った。「出発はいつや。」

「すぐや。」

「お前、俺にもそこで仕事と嫁はんを見つけてくれや。」

それは冗談でおわってしまったが、トーピーは、イッファンとサキーナーそれにシャブナムのいない生活に耐えられるだろうかと深刻に考えぬわけにはいかなかった。彼は再度全くの一人ぼっちになってしまった。家財道具がまとめられ始めた。彼は頭陀袋に荷物をまとめた。他ならぬトーピーが人力車を呼び、列車に荷物を運び込ませた。

「手紙くれるやろね。」サキーナーが尋ねた。

「おっちゃん、おっきい車でジャンムーにおいでね」とシャブナムが口をはさみ、おかげでトーピーはサキーナーに返事をせずに済んだ。

列車は行ってしまった。彼はプラットフォームに立ちつくした。

「恋の薬を売ってた男は、店をたたんで行っちゃった…」学生が一人、こう口ずさみながらトーピーの傍を通り過ぎた。トーピーが振り返ってそいつの方を見ると、相手は視線をそらした。

それから、学生の集団に哄笑がわき起った。その声はトーピーを答打つものだった。

## 16

イッファンも、サキーナーも、シャブナムも、皆行ってしまった。

(サリーマーはといえば嫁に行ってしまった。)

トーピーは孤独という十字架に磔にされた。そしてアリーガルは、トーピーを蔭口、中傷、聞こえよがし、それに目くばせ、後ろ指の的にした。トーピーは血まみれになった。

ヤクザのナイフでさえも、こうは傷つかなかった。

バルバッドラ・ナーラーヤナ・トーピー・シュクラ先生の人格は散り散りになってしまった。三つのかけらはジャンムーに行ってしまう、あとひとつかけらがアリーガルに残った。そしてその最後のひとつかけらをそれ自身の影が取り囲んだのである。

トーピーの願望は、一つとして叶えられなかった。母に自転車を生んで欲しかった時生まれたのはパイラヴだった。サキーナーにラーキーを結んで欲しかったのに、彼女はジャンムーに行ってしまった。サリーマーと結婚したいと望んだが、彼女は論文を書かせて、ワーヒド・カーンとかいう男と結婚してしまった。仕事に就きたくても、ある時はヒンドゥーだからといって、またある時はムスリムだからといって締出しを食った。一人の人間が、どれほどこわれるものか。トーピーはそんな問いをわざわざ考えてみたことがな

かった。本当を言えば、こんなことは、せいぜい小説の主人公が考えるくらいの事だ。第一人生がそんな事を考える余裕を与えてくれるものか。しかしトーピーは、自分が妥協できぬ性格であることを自覚していた。それだからこそ、イッファン、サキーナー、それにシャブナムが発った後も、彼はアリーガルを離れなかったのである。この決断は彼の人生において最も重要な決断となった。が、トーピー自身は人生において、極めて重大な決断を自分がしたということさえ知らないでいた。そして、この決断がどれ程大きいものだったか、結局、知ることはなかったのである。しかし、筆者には、数日後トーピーのこの決断が、彼の伝記のクライマックスであったことが分ってきた。ここで、少し物語の進行を止めさせて頂きたい。それは読者の皆さんが聞きたくてうずうずしている質問に答える時が来たからに他ならない。私は小説家ではない。話をわがもの扱いして、気が乗れば話し、気が乗らなければ話さぬような、そんな小説家ではない。小説家の独断が許されるなどとは決して言わない。小説家には疑問がぶつけられるべきだし、彼はそれに答えるべきだ。質問は多種多様であろうし、答えにしても同様である。伝記と小説には一つの違いがある。伝記作家は、その話に自分の側から一切付け加えることが出来ない。出来事の順序すら変えてはならないのである。他方小説家は自分の都合で出来事の順序を決める。そしてあらゆることを自分の裁断で話してゆく。もし私が小説を書いているのであって、トーピーがその小説の主人公であるなら、私は彼に「それで」を「ほんで」とか、「すぐに」を「しゅぐに」などとは発音させないだろう。しかし、トーピーは私の創造物ではない。青油のドクトル・ブリグ・ナーラーヤナ・シュクラ氏とルームドゥラーリーとの「創造物」である。彼は「それで」を「ほんで」、「すぐに」を「しゅぐに」と発音していたのだから、それを訂正したりすれば、この伝記はにせものだということになる。そんな事があるから、伝記を書くことは、小説よりずっと骨の折れる仕事なのである。

トーピーは別にロマンチックな物語の主人公ではないし、大体そんな柄でもない。自叙伝の主人公にも、なれるかなれぬかという所だ。トーピーは、多くの人と同じように、自分自身の物語なのに主役は他に居る、といったふうな生き方をした。トーピーは今の時代の全ての人と同様、不完全な存在であった。他と寄りそうことがなければ完全にはなりえないのだった。そういう訳で私は散らばっている彼のかけらをここにかき集めてみたのである。ベナレスでのトーピーは、ムンニ・バーブーやバイラヴなしでは不完全であった。そしてアリーガルに來たものの、自己の全存在をもっては來なかった。ムンニ・バーブーやバイラヴはベナレスに残してきてしまい、イッファンとはもう既に離れてしまっていた。

アリーガルでは、イッファンと再会する時まで、糸の切れた風のように不安定な毎日を過していた。それからイッファン、サキーナーそれにシャブナムの三人が、彼を完全な存在にした。しかし彼ら自身もまた不完全なのだ。イッファンは彼の祖母、父、姉なしには語れない。だからその人達についても触れぬわけにはいかなかった。サキーナーの存在は父親のサイヤド・

アービド・ラザーやマヘーシュ、それにラメーシュなしには語れない。だからその事を一言付け加えた。シャブナムはシスター・アーレーマーの挿話をなくしては存在感をもたない。ムンニー・バーブーを理解する上で、ムンニーバーイーやムスリムの商売女は知らずに済ませられない人たちだし、バイラヴに近附くには、トーピーがベナレスに戻って応援したカッランという鏡をのぞかなくてはならなかった。トーピーの物語に「その他大勢」だの「脇役」だのがどうしてこうも沢山出てくるのかと目を白黒なさるぬよう、以上申し上げた次第である。

しかし、全的存在でないことや孤独感は、この時代を生きるトーピー達の運命である。もし彼が千五百年前に生れていたなら、話も少しは違ったものになっていたろう。ここまでこない内に、いつかの別の戦いで、討ち死にしていただろう。そうなら、こんなに多くの人たちの話をすることもなかったろう。頭が痛いのは、これが誰か偉大な人物の伝記ではないということだ。これはちっぽけな男の一生の話である。私の描く主人公はラージカプールでもダリープクマールでもない。だからこそ己れの不完全さに苦しみ続けるのである。そしてそれ故に、イッファンとサキーナー、それにシャブナムが去った後、残ったものは魂の抜け殻だけだったのだ。それに空き屋が一軒と。人の住んでいない、だが家賃の上ではまだ住むことのできる家。

駅から出ると、もう行く所のないのに気がついた。なるほど、ほんの少し前までイッファンが住んでいた家がありはした。その家にはあと二十一日間住むことが出来た。貸家で、イッファンは1ヶ月分家賃を払った後だったのだ。だがトーピーはその家のことを思うだけで身震いした。

一人の車夫がその悩みを片付けてくれた。シャムシャード・マーケットの四つ辻にたむろする力車だった。トーピーを見知っていた。トーピーを見つけるとすぐ力車を走らせてきた。

「だんな、いかがです。」彼は座席を手で叩きながら言った。

トーピーの人生は命令に従うことで過ごされてきた。それ故彼は黙って力車に乗った。力車は走り出した。車夫は行き先をたずねもしなかった。力車人夫ばかりか、大学中の者が、トーピーの行き先を知っていた。

力車はもとイッファンの家の前で止まった。そこでは彼はサキーナーとよく言い争ったものだった。シャブナムによく英語を教えられたものだった。

ポケットから鍵を取り出してこの家の錠を開けるのは妙な感触であった。この家の戸はいつも自分のために開かれていたのだから。

彼は中に入った。

家も、部屋も、壁の色も、みな前のままだった。内庭の鉢に植えてある花の苗木もそのままだった。シャブナムの植えたジューヒー（ジャスミンの一種）は新芽が重たげだった。風はいつものように部屋の中をのぞき、ベランダで踊っていた。内庭では笑いさざめき、草花をからかっていた。可哀そうに草は茎が折れそうになっていた。

彼はイッファンの部屋を覗いた。嵌め込み式の本棚に、本は一冊もなかつ

た。イッフェンの椅子が置いてあった場所にはもう何もない。ランプ台のあった所を見ると、今もそれはある。イッフェンが、トーピーのためにランプを置いていったのだ。

彼はうろたえて、部屋を出た。

サキナーの部屋はひっそりとしていた。彼は窓枠に腰を下ろし、かつてはベッドが三つ並んでいたが、今は裸の床を眺めた。部屋の隅にチャールミーナールの吸殻が落ちていた。一まるでこれだけが待っていたかのように。彼はかがんでその吸殻を拾い上げた。しかし、力なくそれをまた床に落とすと、その部屋からも抜け出た。

この家ではどうしてもくつろげなかった。これ以上ここにとどまっておれば泣き出してしまいそうな気がした。そこで、家に錠をかけると、そのままあてもなく、シャムシャード・マーケットの方へ歩き出した。

十月の寒い晩だった。探偵小説やスパイ映画によくある様に、人々は外套の襟を立て、急ぎばやに後から後へと歩いていた。バハードルの店はいつものように込んでいた。その向いの店では、サイヤド・ハビーブが芝居がかった顎髭をうごめかして、例の（つまりカン高い）声で喋っていた。

「女に逃げられたんやってな あお前！」二人掛けの椅子の方で声がした。しばらくして学生が数人吹き出した。トーピーは、自分のことと知ってはいたが、サキナーはもう、シャブナムとイッフェンを連れてジャンムーに去った後だ。振り返ってみたところで、どうなるものでもあるまい。彼は先に歩を進めた。サーハブ・バークの部屋からは光が洩れていた…。彼はその光に誘われて、ただただ歩き続けた。

「恋人を殺すなど、だから言ったのに。おかげで一人きりで、  
さまよって。」

学生の一団が通りかかり、その中の一人がよく通る声でウルドゥー詩を読んだ。その声は笞で叩いたような傷跡をトーピーの魂に残した。しかし彼が何も言えぬのは明らかだった。彼は、イッフェンがなだめすかしてもアリーガルにとどまったのである。そして今、ここにとどまった代償を支払っているのだ。

彼は、「アーザード・カフェテリア」に向った。そこへ行けば顔見知りになれるだろうと思ったのである。

店先で、学生食堂のおやじのワージド・カーンが、その大きな体軀をもて余しながら、ジャズビーに、多分大学上の何かの問題について、説いて聞かせていた。ワージド・カーンは、トーピーを認めると微笑みかけた。…

## 17

話も終わりに近附いたがここで新たな登場人物を紹介させて戴きたい。むしろそれは語りの作法に反する。しかしそういった作法は随分と以前につくられたものだ。ワージド・カーンを登場させるのは今しかない。大体ワージド自身、話の始まりでなくて終わりという人だ。であれば、トーピーの話の

始めからどうして登場などさせられたろう。

ワージドを見て詩人だと思ふ人はまずあるまい。ところが、彼は堂々たる詩人なのだ。文学界ではジャーヴェード・カマルの名で知られている。学生食堂で茶を売っているのは確かにワージド・カーン。一体彼がワージド・カーンなのかジャーヴェード・カマルなのか、筆者も時に迷うことがある。始終パーンを噛み、お喋りで、美の崇拜者だった。彼は自分の声をいやでも自分で聞かねばならない、何故なら我々の世界では、代理人のいない人の声など誰も聞かないからだ。いったん口をつぐむと、自分にも声があったことを忘れてしまうのではないかと、それが恐くて絶え間なく喋りつづける。家族の人からはワージド・カーンだと決めつけられ、彼自身は自分をジャーヴェード・カマルだといって譲らない。だが「ワージド・カーン」は亡霊のように彼にまとわりついてしまった。この亡霊から逃れんがために、彼はジャズビーのような平凡な男や、ものわりの悪い、安っぽい自称詩人とさえ、何時間も口角泡をとばして文学上の問題を弁ずるのだった。そうしてその仲間連中にお茶を無料サービスするのだ。一見彼は一人のまともな男だ。が、それは禿げた神様に囲まれているから、今はそう見えるのである。

トーピーの話を中断して、何だってワージドの話など始めたんだと、読者は思っておいでだろう、だから、まず申し上げておきたいのは、ワージドもトーピー物語の欠かせぬ部分だという事だ。この台本の一場はワージドの舞台上で演ぜられた。そして今はもう、風がトーピー物語の一頁をめくり、私達の目の前まで運んでくれようとしている。それ故、その幕の演ぜられる舞台をお見せするのがよからうと思う。トーピーとサリーマーを仲良くさせるのには、ワージドが一役買っていたのである。

アリーガルで一人取り残された時、トーピーは真直ぐこのワージドの所に向ったのだ。それだけでも、ワージドの存在の重さを感じとっていただきたかった。それだからワージドの話をしているところなのだが…。

ワージドの体軀をもってすれば大力士にもなりえた。ところが詩人なんぞになって、一向にうだつが上がらない。そうでなければ、今頃ダーラーシんくらいの映画スターにはなれていたろうに。女学生らはワージドの、アーモンド色の眼の輝きをこわがっており、ワージドは後ろぐらいことをするような性質ではなかったので、彼の人生も過ぎたのだとしたら——人生は過ぎゆくものだ——仲間に力を貸すうちに過ぎたと言えるだろう。誰かが誰かと恋に落ちる。あとの仕事はワージド・カーンがひきうける。たっぷり言いふくめてくれるので、彼氏の方は恋愛などというものが金輪際嫌になってしまったり、やけになって他の娘に気を移してしまったりする。

だがワージドについて最も肝心なことを言い忘れていた。彼はイッファンの友人だったのだ。大学まで二人は一緒だった。大学院ではイッファンは歴史を、ワージドはウルドゥー語を専攻した。首席で院を出るとイッファンは講師になり、こちらは茶を売り始めた。いや、幾日かの間は靴も売った。ところが悪友ども、詩人仲間、それに文士連中はどいつもこいつも後払いの

約束で靴だけつくらせ、とうとう店はやっていけなくなった。神さまの気分次第では、学生食堂でも同じ目に会うところだ。

トーピーにはイッファンが、ワージドを紹介した。ワージドは、トーピーがイッファンの幼な馴染だと知ると、トーピーを自分の幼な馴染にしてしまった。そう、ワージドはそういう男だ。

トーピーとワージドの間には何ら共通項がなかった。ワージドは美の崇拜者でありトーピーは典型的なぶ男だった。ワージドは音楽愛好家でありトーピーは親譲りの音痴だった。ワージドはヒンディー語を嫌がり、トーピーはよりによってヒンディー語を専攻していた。ワージドは始終パーンで口中真赤にしており、トーピーはとくると、ビナーカー歯磨きの宣伝ポスターに出ていいくらいだった。…ただ、ある一点で二人は結び付いた。ワージドは話し好きで、トーピーは聞き上手だったのだ。トーピーは何時間もその熱弁を聞くのだった。

ある日ワージドは、ジャズビーにつかまって、面白くもない話をきかされていた。禿げちょろ氏は友人の、いい年をした下女の話をしていて。その下女は禿げ氏に懸想して気が動転し、ブレール・クリームの瓶を盗んで来てしまったとか。この話をするジャズビーの眼は次第に一種うす汚れた光を帯び、汚ない歯はむき出しになった。そしてウヒヒと、まるで、疥癬を長年患っている者が、傷をひっかいて快感に身もだえしている様な声をあげた。実際、ジャズビーの神経は昔から疥癬に冒されているのだが。ワージドは、じっとこらえていた。そうして、吐き気を微笑の内に隠そうと努めていた。

「そんな話より、詩の方が余程お上手ですね。どうして詩作をおやめになったんで？」トーピーが口を出した。

ジャズビーのにやけ顔がこわばった。

「学生の分際でようそんな事を！」ジャズビーはカッとして言った。

「そちらのような人が恥かし気ものう教師になってますのに、一寸口をはさんだくらい、どうってことないでしょう。」トーピーは負けていない。

「余計なこと言うな、阿呆。」ワージドが目くばせした。しかしトーピー、

「退屈しとるのは同じやのに、よう言わなんだけやろ。ほんまは、言いたいこと言うてもろて気がすっとしてるとちがうか。血迷うた下働きのおばはんの話聞いて何になる？」

ジャズビー氏は怒り心頭に発して席を立てて行った。氏が立ち去った後、ワージドは苦笑いしてトーピーの方を向いた。

「ほんまにけったくそ悪い奴や。」

「いつか、ガーリブかなんか教えながら、家政婦の話をはじめ（シュルー）んやないかと心配や。」

「やった！」ワージドはトーピーの背中をたたいて言った。「シュルーをようちゃんと言うたな。」

笑い声が起こり、正にこの時、サリーマーが、講師と一緒に食堂に入ってきた。誰よりも早くトーピーがそれを見つけた。

「なあ、あの子、なんとかならんか？人生がいや（ハラーム）になるわ。」トープーが言った。

「黙っとれヒンドゥー！おまえがハラームやハラールに何の用や。」K・Pが言った。

トープーは、いっとき二の句がつけなかった。というのは、K・Pこそヒンドゥーだったから。「女の子に人生だめにされたというて、うじうじと愚痴をこぼしてるとは、お前もつまらん奴や。」

「ちと気いつけてもの言わんとな。」ワージドが口を出した。「シャーハジャハーンブルのパタン族出の娘や。稲穂みたいに刈られて干されるまで、庭にむしろ敷いてな。」

「そうされたいやろ、トープー、あの娘にやったら、なあ。」K・Pが言う。

「このくそったれが、ムスリムの娘なんぞに色目ついたら、その足かっ切ってほうってやる。」とワージド。

「なんの、色なんかついてないきれいな目で見ろわ。」トープーは真面目くさって言った。

「何千度でもどうぞ。」ワージドは、言いやがったな、という顔をした。「お前のその性格だけはどうにもならんな。」

「お宅も相当コミューナルやな。」トープーは笑った。

ワージドは、待ってましたとばかりに、コミューナリズムをくさしはじめた。知っているかぎりの悪態を言い尽くすと、やっと意味のある話に戻った。

「お前みたいな色黒のぶ男に、あんな美人はあんまりすすめられんな。自分の顔見たことあるやろ。キーウィーの宣伝ポスターと…。」彼は何かうまい喻えを見つけようとして詰まってしまった。

「この顔と、レンズ豆のダールという喻えじゃあかんか？」

ワージド・カーンは、持ち前のラームプリー風高笑いをした。食堂がしんとなった。サリーマーはこちらを振り返った。

「もう、ここは詩人の集まる所やのうなったな。」サリーマーの連れが言った。

隅に席を占めている学生らが、お勘定、お勘定、とコップをスプーンで叩き始めた。その時、サリーマーの連れは、自分のポケットに金がないことに気が付いた。運悪くサリーマーのバッグにもお金がなかった。連れは冷汗をかき始めた。サリーマーは決心して立上るとワージドの側に来た。

「ワージドさん！昨日ファクルーから手紙が来て、宜しく云うてました。」

実はサリーマーは、父方の従弟ファクルーの言伝を四年半も放っておいたのだ。彼女が大学に入るためにアリーガルに発とうとしていた時、ファクルーはワージドへの便りを言付けた。ところがサリーマーは、そんな面倒はうっちゃった。ファクルーはどの手紙でもワージドの様子を尋ね、サリーマーはどの返事にも、ワージドさんはこんな事を言っていた、あんな事を言っていた、と書いてすませた。だが、勘定の支払いに困ったとなれば、ワージド

の傍に来ざるを得なかった。

「さあ、さあこっちへ。」ワージドは言った。トーピーは体をずらして席をひろくした。サリーマーはトーピーのすぐ側に坐った。その真向いに連れの講師が腰かけた。「お茶は？」

「いえ結構です、今飲んだばかり。」

「勘定はすんだんかいな。」

「それがまだ、あの…」

「ファクルーは此の頃どないしとる？」給仕がサリーマーらの勘定書を講師の前に置いた。ワージドは奪いとるようにしてそれを取った。そうして給仕に噛みつかんばかりに悪態をついた。そんなときは目の前に女性が坐っていることなど頭にはないのだった。

「でも、ワージド・サーハブ……」

「ええかジャナブ、この人はな、ファクルーのことを話しに四・五年ぶりに来てくれたんや。」ワージドは言った。「はよ向うに行け。」こう給仕にどなりつけると、給仕はにやにやしながら立ち去った。「このファクルーいう奴も妙な奴でなあ、トーピー。こっちにおるときは審美家やったんが、向こうに行ったら、アラーの神の存在証明はじめよった。噂じゃ三、四千ルピーの月給もろとるらしい。」

「アラーの神さまさま、ええことずくめやな。」トーピーが言った。

「こいつとは会ったことあるなあ？」ワージドは、トーピーの方を指して言った。「これはここのムスリム・リーグ党ヒンドゥーや。」

サリーマーはにっこりした。

「はなわしは行くぞ。」K・Pは席を立ちながら言った。

誰も返事をしなかった。K・Pは行ってしまった。ワージドはファクルーの話始めた。サリーマーは仕方なく聞き始めた。講師は幾度も腕時計に目をやった。ひとつ話がおわったら、席を立たせてもらえらるだろう。とそれを願っていた。だが彼はワージド・カーンをよく知らない。筆者はワージド・カーンと十七・八年のつき合いだが、これまでワージドはひとつでも話をまともに聞かせおおせたことがない。私は十七・八年前から繰り返し繰り返しそんな話を聞いてきた。そんな話全部空でいえるほどだ。但し、十七・八年前途中で終った話は今でもそのままだ。何かひとつの話が一番盛り上がった所で、別の話を持ち込むのが、ワージドの話し方だ。それだから、ワージドと話をする時には、我々は時計を外してポケットに入れる。だが、こんなことを、その哀れな講師がどうして知っていよう。もう授業の時間が来ていた。サリーマーを射とめるために仕事をふいにする訳にはゆかなかった。そこで話の途中で彼は立ち上った。

「失礼します。授業なもので。」

「と、ファクルーは大声で笑った。さあ次の話や。」ワージドは聞かぬふりをしてサリーマーに言った。サリーマーとしては、微笑み返すより仕方がなかった。その連れは内心ワージドをののしりながら向うに行った。講師が



行ってしまうとワージド・カーンはうちとけた風になった。シェールワーニー服のポケットから紙袋を取り出し、パーンを口に入れた。「のう、あんたはファクルーの妹同様な。そやさかいこんなこと言うても気にせんやろ。さっき一緒に居った男はな、ありゃどうしようもない男でな。あんたのことで、たわけたことを言いよる。そのくせ意気地がのうて、チャンスがあっても何もしよらん。浮気っぽうて一遍に二人も三人も好きになる…」

「ワージドさん、何の話やの。」サリーマーが言った。

そして相当長い間、四方山話に花が咲いた。ところがサリーマーは、トーピーと話していることすら気付かないでいた。サリーマーが行ってしまうと、ワージドは三つめのパーンを口に放り込んだ。

「気の毒に、お連れが行くとき、無視したやろ。」

「ああ、あんな奴。つまらん。」ワージドは、まるで教師の口ぶりで言った。「あれに構うておったらサリーマーまで一緒に行ってしまうたやろうが。」

「それで、俺、あの娘に惚れてもええのか？」トーピーは息込んで尋ねた。

「トーピー、まあ聞け。」ワージドは真面目になった。「ファクルーが、そのことで便りをくれたことがある。あの娘が来たばかりの頃や、ファクルーとわしとは別段友達ではなかった。けど、仲良くあいさつくらいはしておった。それにあの娘はファクルーの許嫁やで、多分。そやから、好きになるんは勝手やけど、わしにはもうこの話はやめてくれ。」

これは、サリーマーが寄宿舎を出て、父方の縁者のいるアミール・ニシャーンに身を寄せたころの話である。預ってくれたのは、叔父でもあり、もと警察の署長でもあった。

丁度その頃、ハイデラバードだったかシカンダラーバードだったかから、こちらに來たての人があって、心理学の講師になった。名を、ドクター・ワーヒド・アンジュムと言った。「ドクター」をご自分でも名前の一部と心得ておられたので、私もきちんと申し述べたのである。「ドクター」抜きでは、何か足りない感じがした。ウルドゥーの、知らぬ人のないほどの詩人だった。一方、アリーガルは詩人だらけの町である。諸手をあげて歓迎された。そのムードに酔って、ドクター氏は「マジュヌーン」ゴーラクプリーほどの偉人らを甘く見た口をきき始めた。ガーリブのあと詩人と呼べるのはこのわしだと言う。ガーリブだって大したこたあない！

その結果、アーズマガルのカリールルラハマーン、シータープルのカージー・アブドゥルサッタールなどの連中と、意気投合したり、犬猿の仲になったり、した。

さて、サリーマーがいるからこそ、このドクター・ワーヒド・アンジュム氏も、この物語に欠かせなくなってくる。ある日、氏は一目でサリーマーにぞっこん参ってしまった。が、いかんせん、サリーマーはヒンディー語学部、氏は心理学部、会う機会がない。気の毒に氏は一人胸を焦がしていた。一方サリーマーは次第にトーピーに近づき始めていた。

サリーマーとトーピーが仲良くなるにあたって、トーピーは特に何を仕掛

けた訳でもなかった。既にお話ししたように、サリーマーはトーピーをいか  
がわしい男だと思っていた。それである日サリーマーはワージドに言った。

「ワージドさん、一つ聞いてもええ？」

「構わんよ。」ワージドは、パーンを嚙んで口中にたまった唾を何とかこ  
ばさないように返事した。

「トーピーみたいないい人らしい人とようつきおうてはりますね。」

ワージドは立上り、窓の格子に唇をつけて唾を吐いた。最後のものがシェ  
ールワニー服にかかった。ハンカチでそれを拭いながら、ワージドはサリ  
ーマーの側に来て座った。

「訳が分らんが。」

「人がいうてますよ。あの人ザルガムさんの奥さんとええ仲やて。」

「噂じゃ、あんたもどんだけの男と出来とることになっとるかご存じか？」

サリーマーは驚いて目を見張った。自分の「恋人」のリストが相当なもの  
であることは知っていたが、まさかそこまで言っているとは知らなかった。

「例えばやな、あんた、ヒンディー語学科の色の黒いのと出来とるという話  
やないか。」

「あの人のことやったら、うち、シャルマーさんに言いに行ったわ。」サリ  
ーマーの目がとがった。「うちを家に呼んでたのが、シャルマーさんの前で  
きちんと謝ってくれたし、今はうちのこと自分の妹のように呼んでるわ。」

「そうかもしれんが、」ワージドは無関心に言った。「あんたより前にも  
女学生で、奴のことを言いつけたんが居ったな。まあそれはそれ、わしゃあ  
んたがどいつとどいつの彼女いうことになっとるか、話しとったんや。あん  
たは知らんやろうが、あんたがこっちに来たとき一緒やった、あの機嫌とり  
ともええ仲やいうことになっとる。おんなじ学部じゃ、ザィディーとも、そ  
ういう目で見られとるし、このわしとも、そんな噂がたっとるんや。」ワ  
ージドは興奮して、パーンの葉を二枚口の中に放りこんだ。サリーマーは泣き  
ださんばかりである。「お嬢さんよ、ここはこまい町やさかいな。ぎょうさん  
柄の悪いのも居るし…」

そんな話になった時、トーピーがやって来た。

よう、と声をかけ、にこにこしてトーピーは二人のそばに腰かけた。

「今、わしがお前とどうやってつき合うてるか、きかれとった所や。サキ  
ーナーとええ仲になっとるお前なんかとな。」

トーピーの黒い顔が赤くなった。サリーマーはひどく狼狽てた。ワージド  
は癪をたててパーンをむしゃむしゃと嚙んだ。

と、トーピーはワージドに、「なあ、真面目な話やで、これは、」そこで  
立上り、サリーマーの方を向いて言った。「お蔭さんで、そちらさんに気い  
ひかれてはおらん。」言い終わると、矢庭に向きを変え、食堂から出ていった。

「ワージドさんなんであんなこと…」

ワージドはもう不機嫌のきわみで、サリーマーに返事もせず、カウンター  
の方に行き、勘定を払い始めた。そこヘイッファンのやって来るのを見て、

サリーマーは身のすくむ思いがした。丁寧に辞儀をした。食堂に空席は無かった。そこでイッファンはサリーマーのそばに立止った。

「お茶をどうぞ先生。」サリーマーは言った。

「先生やなんて言わんといてくれよ」イッファンは坐りながら言った。「君はファクルーの妹みたいなもんや。ぼくはあいつと仲がよかったし、予科生なぐりが計画されたりすると、ファクルー兄貴は僕に言いに来てくれた。おい、今日のミーティングには来るな、いうてな。けど僕は行った。そしたら、手加減して殴ってくれた。いちど、グルレーズ・カーンの手にかかったことがある。それ見て、ファクルーの兄貴、カヴァル・アマナトをばかばかやりながら、大声で言うたもんや、カーンさんよ、そいつはおれの友達やてな。一寸考えてもみいな。」イッファンは可笑しくて堪らぬように笑った。そしてワージドの方を向いて言った。「なあワージドさん、グルレーズ・カーンがどうしとるか知りませんか。」

ワージドはカウンターを立ててまたそこに来た。まだ機嫌は直っていなかった。やって来るなりサリーマーに言った、「この人に聞いてみ、トーピーとどうやってつき合うてるのか。」

イッファンはかん高く笑って、「ほう、君もそれが心配なんか！」それから真面目顔になって、「ほんに、ここはけったいな所や。」給仕が来たのでイッファンはサリーマーに言った。「ま、そんな話はやめや。何飲む？」

「今、ワージドさんにいただいた所です。」

「なら、こんどはイッファンさんにもおごってもらい。」こう言って、イッファンは給仕の方を向き、「ワージド・カーンにコーヒー、ぼくら二人にはお茶を、大至急、十五分で行かんならんや。」給仕が行った。イッファンはまたサリーマーと話を始めた。「家内のサキーナーがいつも君のことをきくんや。もう、うちに一年半くらい顔みせへんのとちがうか？用事がなかったら一緒においで。家に帰る所なんや。それに、そうそう、ワージドさんよ、これを思い出してもらわんとなー今日はシャブナムの誕生日なんや。もし今年も知らんふりしとったら命の保証はせんで。」

給仕がお茶を運んで来た。サリーマーはそれをつぎ分けた。だがサリーマーは、イッファンと一緒にお茶を飲むことを異様に感じていた。トーピーはそこに居なかったが、内心トーピーに対して恥かしく思っていた。

ややあって彼女はイッファンと共に席を立った。

サキーナーはサリーマーを見てパッと顔を明るくした。その顔を見ると、サリーマーは恥かしくてならず、子供のように泣き出した。サキーナーはどうしたことかとあわてた。

「一体、どないしたん？」

「何でもないんです、奥さん。」

「そんな大人のくせして泣くん？」シャブナムが一人前の顔で言った。サリーマーはシャブナムを抱きよせて笑った。と、その時玄関からトーピーの声がした。

「誰かトーピーに一杯お茶を飲ませてくれる人はおらんかいな。」と言いつつ入ってきたトーピーの視線がサリーマーに落ちた。トーピーははたと口をつぐんだ。

イッファンは、一種緊張した空気を察知し、即座に言った。「ウルドゥー反対の会はどうなった？」

「決議案（レジュレーション）が一つ通った。」

「あーあ、ウルドゥーがおきらいならウルドゥーを間違って発音してもええけど、英語が、なに悪いことした言うんや？」

「サリーマーに紹介せんと。」サキーナーが言った。「この人は、なんやらナラーヤン・シュクラ・別名・トーピーいうねん。青油のドクトル・なんやらかんやらナラーヤンの息子。肝心なことは、この人うちに夢中で、うちもひっかかってしもたいうことやねんわ。」

「みなご存じや。」トーピーが言った。

サリーマーは穴があったら入りたい程恥かしかった。

「奥さんよ、それにしても、なんで自分の浮気をそんなに言いふらすわけ？」

「柄のわるい。慣れ慣れしい呼び方せんってくれる？ 恋人なら歌でもきかせなあかんわ。身をよせかけるヒロインにその恋人が歌をうたってきかせるとき、どんなに胸がときめくか。さあトーピー！ ひとつ歌をうたって頂戴」

その日、その家を出たときサリーマーには一つの変化が生じていた。彼女は帰り道ずっとトーピーのことを考え続けていた。休むため床に就いたときもなお、トーピーのことを考えていた。

サリーマーの叔母は、息子がことわりもせず映画を観に行っただけで、臍癢をおこしていた。夜中の一時も二時もすぎて帰ってきて、家中の者の眠りを妨げるだろう。

「もう休みはったら、」サリーマーは言った。「うちが起きてるから。」

「何をいうてんの、あんたかいていつまでも起きてられへん。」

といいながらも、叔母は横になり、ほどなく寝入ってしまった。サリーマーは、しかし、ずっと目をさましていた。

夜更け、玄関の鐘が鳴った。サリーマーは起上って戸をあけた。ところが戸口には、いとこの代りにドクトル・ワーヒド・アンジウムが立っていた。

事の次第を話そう。ウルドゥー語科の教官二人と、ドクトル・ワーヒド・アンジウムは「ナショナル」でラムを飲んだ。その二教官は詩作の趣味があった。三人は三人ともわずかの酒で酔っぱらって、それぞれ自分を世界一の詩人だと思い始めた。しまいには相手のけなし合いになっていた。ウルドゥー語科の二人は心理学部の詩人をほうって行ってしまった。ドクトル・アンジウムはこれ幸いと、ナショナルの給仕をつかまえて自作の詩をきかせ始めた。給仕は気の毒に退屈至極だった。というのは、ドクトル氏からチップは期待できそうもなく、また、氏はひどく難しい単語をつかったからだ。

「警察よぶで」給仕は賞賛の代わりにこう言った。ドクトル氏は酔っている

ても、警察沙汰になってはただですまぬことくらい分った。

駅前通りには夜のしじまにひんやりした風が流れていた。ドクトル氏はいい心持に酔っぱらっていたが、こんなとき頭に浮かぶのはきまってサリーマーのことだった。

酔いのせいですっかり気の大きくなったドクトルは、素朴な妻が帰りを待っている家のことはほったらかして、サリーマーの家の戸の鐘を鳴らした。

サリーマーが戸をあけると、手を差し伸べ、夢中で口説き始めた。

「おんみを永遠の人と詩によむつもりや、もう胸がいっぱいでな…。」

サリーマーが、のびてくる手を見て叫び声をあげなかったら、ドクトル氏は思いのたけを打ち明けたことだろう。が、サリーマーは金切り声をあげた。もと警察署長氏とはび起きて、誰であれ元署長であるとか威厳ある人なら当然なすべきことをした。つまり、まずはドクトル氏を五・六度殴りつけたのだ。ドクトル氏はひよわな男だった。もんどり打ってころげた。眼鏡は毀れてふっ飛んだ。

「どないしたんじゃ。」署長氏はサリーマーに訊うた。

「この人、うちを…」と言いかけてサリーマーは口をつぐんだ。

叔父には、サリーマーが黙ってしまったことで充分だった。追いうちをかけて殴り始めた。気の毒にドクトル・ワーヒド・アンジュームの酔いは一遍に醒め果てた。

サリーマーの叔父は、ドクトルの襟首をつかんで立たせ、

「さあ、警察や。」とうながした。

警察、ときいてドクトル氏は震え上った。すがるように言った。

「大学の講師をしておりますのや、そんなことされたら、仕事をクビになってしまうよって…」

仕事ノ

この言葉は、なんと強迫的でいやな言葉であることか。ワーヒド・アンジュームは体面の心配はしなかった。何故なら体面なぞ今はもう、ありもしないのだから。今は仕事が、体面に取って代っている。

しかし、かびくさい、あるいは今も生きている伝統に縛られた大学の先生でいて、こんなことが出来ようなどとは、叔父には納得がいかず、信用しなかった。丁度ドクトルは近くに教え子が一人住んでいることを思い出し、その生徒を起こして証言してもらった。というわけで叔父はドクトル氏の尻を蹴って、家から追い出した。

しかしながら、叔父はかつて警察の人間だっただけのことはあって、ドクトル氏に、暴行をうけた、などと訴えられては困ると考え、用心のために、本署にこれを届け出た。

きっと、読者諸兄は、こんなことを何だっけこうも詳しく聞かされるのか、いぶかしがっておいでだろう。私は別に推理小説を書いている訳ではないのだから、今すぐこの出来事の意味をお話ししよう。ファクラーの婚約者は、二年間というもの、トーピーと（怨をして、ではなく）怨の真似事をしたあ

と、正にこのドクトル・ワーヒド・アンジュムと結婚したのだ——こういうわけで先程の一部始終をお話しする必要があるがどうしてもあった。これが、納得のゆかぬ話であるのは著者もよく承知している。しかし、納得がゆかぬからといって、サリーマーを、ファクルーかトーピーのいずれかと結婚させるわけにはいかない。現実の人生と虚構の人生との間にはこの違いがある。もし私が粉で縄をなっているのなら、サリーマーをファクルーに嫁がせたりし、或いはまた、民族融和のために、トーピーと結婚させたりしよう。しかし私は粉で縄をなうような真似はしていないし、民族融和推進計画を立ててもいない。私はただ、トーピーとその片想いの相手、そしてその状況をお伝えしているだけなのだ。私は物事を隠して人を不安がらせるつもりはない。それだからこそ、始めから言っておいたのだ、サリーマーはトーピーとは結婚しなかった、と、そして今は、サリーマーが、ドクトル・ワーヒド・アンジュムに嫁いだことをお話ししている。だがこの結婚は、そう簡単にはまとまらなかった。サリーマーと結婚するためにドクトル氏は、パキスタンに行かねばならなかったのである。パキスタンではこんなことも公言せねばならなかった。——カシミールはパキスタンのものである。インドのムスリム人口が4750万人などという統計は嘘っぱちだ。インドの全ムスリムは暴動で殺されてしまったし、残った者もみなヒンドゥーの浄めの儀式をすませたあとだ。自分こそは命拾いしてパキスタンにやって来た、唯一のムスリムである。…じゃあ、インドからなお暴動のニュースが伝えられてくるのは何故なのだという質問に対しては、こういった報道は、インドにもうムスリムがいないことを世界に知らせまいとして、インドが時折印刷させるにすぎないのだと答えた。その結果、ドクトル氏は、パキスタン代表団と一緒に、カシミールについての論議に加わるためU・N・Oの集会堂にまで行くほどになった。戻ってくると氏は、ある新設大学の副総長にさせられた。こうなってはファクルーに勝ち目はなかった。その上、こちらアリーガルでは、サリーマーはトーピーに論文を代筆してもらったあとだった。こういう訳でドクトル氏とサリーマーの結婚には何の支障とてあろうはずもなく、とんとん拍子に話が運び、あっという間に二人は結婚した。

しかし、先に私がお話しした事件の意味は、このことがサリーマーとトーピーの間に深い友情をもたらしたということなのである。

あの翌日、昨夜ドクトル氏が殴られたという話は大学中にひろまった。話をひろめた主犯は、あの晩ドクトルと共に一杯やっていた男である。

話が面倒になるのは、ドクトル氏は殴られると、今度は本当にサリーマーに惚れ込んでしまったことだ。氏はヒンディー語学部の辺りをうろつきはじめた。しかしサリーマーはPh・Dをとらねばならなかったし、その頃ワーヒド・アンジュムの月給はごく僅かなものだった。

サリーマーは、トーピーに対してはもう打ちとけるようになっていた。そこで、トーピーと一緒にいるサリーマーの姿がよく見られるようになった。街は色めきたった。地方ゴシップ記事に、トーピーとサリーマーの名前が並

ぶようになった。ある紙面にはこの二人がひそかに結婚した、とまで刷られていた。（これは全くの間違いだ、何故なら、もしそうなら、トーピーはベナレス駅の待合室に坐って、サリーマー宛ての手紙を書きはしなかったろう——あとで破り捨ててしまったとはいえ。）

この事から人の意見が二つに分れた。ある人はあんな事があってからもトーピーと益々親しくするようになったとは、サリーマーは随分と大胆な娘だ、と言った。（作者もそう思う。）他方、サリーマーは、単に論文をかいでもらうのがめあてだったのだという人もいた。イッフェンもそうである。だからトーピーがベナレスから戻ってきた時、イッフェンもサキーナーも、サリーマーの結婚のことについては触れなかったのだ。

どちらにせよトーピーは殴られ損であった。

「なあ、あれはほんまに誠実な人やで。」

「ふむ。」イッフェンはチャールミーナールをふかしながらうなずいて言った。「自分に対してやけどな。」

「やいとるな。」トーピーがムッとして言うと、

「この阿呆、も一度うちの旦那にそんなこと言うてみ、承知せんから。」シャブナムが喜んで笑った。

「氣い悪うしょうがしまいが、意見は変えんよ。」

「ムスリムの娘を好きになったもんで、やいとるんやろ。お前らムスリムはみんな、一皮むけばパキスタン人や。」

「うん。それはある程度まで言えるな。」イッフェンは同意してみせた。「パキスタンいうのは、わけのわからん恐れにつけられた名前や。どのムスリムもびくびくしている。何が恐いいうんやろう？何でなんや？なんで僕をうたぐるんや？僕も、なんでお前をこわがತ್ತるんやろう？…」

「発作が始まった。旦那を介抱したりんか。」とトーピーはサキーナーに向って言った。

「ちがうんや、バルバッドラ！」イッフェンが言った。「こんな大きな国をこの二つの言葉がさらった。身代金を要求しとる。」

恐れ！

疑い！

ムスリム！

ヒンドゥー！

白と黒！

家は静かになった。サキーナー、シャブナム、トーピーもろとも、イッフェンは自分の発した問いの毒の海につかった。まるで暗闇が身をくねらせながら、中庭や中庭の上に拡がる広い空を覆い、光のうすれた月がニームの木のとっぺんにあごをつけている様だった。

「なあ、おれらサリーマーの話しとったんとちがうんか。」

暗がりにトーピーの声が響いた。

「サリーマーにしても、やっぱり恐れと疑いの木になった固い実や。よう

聞いとけよ、バルバッドラ、この恐れがいつかきっと彼女を飲み込むやろう。黙ってあの娘の論文をかいてしまえよ。ドクトル・サリーマーになってしまえたら、お前のことなんか忘れてしまうわ。」

「けど…」

「けど何や。」イッファンはトーピーの言葉をさえぎった。「こうやろ、サリーマーは、ドクトル・ワーヒド・アンジウムみたいな野郎とでも結婚できるかもしれんが、お前とはせんわ。」

「何故？」トーピーがきいた。「俺がヒンドゥーやから？」

「ちがう。キシャン・シンかてヒンドゥーや。」イッファンが言った。

「ならはかにどんな訳（カーラナ）がありうる。」

「そこまでごっついヒンディー風のナを発音せんでええやろ。カーランとはよう言わんのか。」イッファンが言った。

「おまえなあ、俺は好きな人のこと話しとるいうのに、言葉を直しにかかるとはしないやろ。お前らウルドゥー語の奴らはヒンディー語をやっかんどるな。」

「やっかどらへん、おっかないんや。」

またこのことば！

恐れ！

この恐れからのがれられはしないものか？わたしこそヒンディー語でありウルドゥー語だ。我と我が身を恐れるようになったとでもいうのか？私の分身は、一方の文字を知らない。それ故その文字を恐れる。言語戦争は、実際は損得勘定の戦いだ。問題は言葉にはなく、仕事にある。

仕事。

この言葉もあちこちで顔を出した。一方の文字を知っている者は安全だ。知らぬ者は怯えていた。わたしのとる二つの姿はことばを知っているのに、インクの線がわたしたちを分けてしまった。

仕事！

この文字が私たちの魂の額には血でかかれてある。この言葉は血となって体中の血管をめぐっている。夢となって眠りを妨げる。私達の精神は「仕事」という杭にくぐられ、文字にうなされながら餌を食べている。

「ヒンディーとウルドゥーだの、ヒンドゥーとムスリムの、いうことが問題やないんや、バルバッドラよ。仕事の問題なんや。今どきの娘は男と結婚するんやない。異性は単に憧れるだけ。結婚は、職業とするんや。愛情かて給料袋の重さ如何、それに社会的地位の天びんではかられる。サリーマーとて同じこと、お前に嫁いでくる娘なんかおらんやろうな…。」

トーピーはその晩、憂鬱で仕方がなかった。サリーマーに胸のうちを明かすべき時期だと思った。しかしもしイッファンの言うことが正しいとしたら？もし打ち明けて笑われたら？

サリーマーが論文の提出を済ませた日、トーピーは声をかけた。

「今日はお茶でもおごってくれるやろ？」



「今はちょうど、ムマターズさんに会いに行くところやねんわ。一つ席が空いて。ミットラ・ダースが半年休みをとったから、それで。」

サリーマーは行ってしまった。

それから似たようなことが幾度かあった。だがトーピーは気を悪くしなかった。笑われるのがこわくて、イッフェンにさえこのことは話さなかった。

そうこうするうち、ワーヒド・アンジュムが、パキスタンに行ったという事が知れた。ラジオ・パキスタンから彼の演説が流れるようになり、ついにある日、副総長になったとのニュースが伝えられた。

そんなとき食堂にいながら、サリーマーはこう言ったのだ。

「どういう積りやろか、うちと結婚したがとるねん。」

「したがとるだけなら構へんやないか。今や副総長や。二、三千ルピーはかたいな。」こうトーピーが言った。

「はな、うち、あの人の仕事にひかれて結婚するわけ？あの人より立派な仕事いうと、ザーキル氏やね。」

これをきくとトーピーは体中がうずうずした。それでも自分の気持を打ち明ける勇氣は出なかった。

「そちらさんはなんで、仕事に就かへんの？」サリーマーが尋ねた。

「そうしたいんやけど、」トーピーは口ごもった。「ヒンドゥーやいうんで断われたり、ムスリムやいうて敬遠されたり。」

「そんなことやととっても、埒が明かへんやないの。」

「そうや、こんなこっちゃ埒が明かん。」

この日の夜、トーピーはカランの選挙戦のためにベナレスへ行ったのだ。

ベナレスから戻ると、サリーマーがワーヒド・アンジュムの仕事に参って結婚したということが分った。——何もトーピーは二百年もベナレスに行っていた訳ではないのに。わずか五日のうちに、話が近道をして、目的地まで着いてしまった。

今ここで作者は、トーピーに分らなかったことをお話ししたいと思う。それは、イッフェンは汽車に乗り遅れたわけではない、ということだ。イッフェンは、もともとサリーマーの結婚式に出る気などなかった。

「この野郎、恋なんかしやがって！」ワージドは言った。「何をつっ立つとる。お茶もってこんか、お茶！」ワージド・カーンは給仕にどなりつけた。サリーマーとトーピーの恋も、サリーマーとドクトル・ワーヒド・アンジュムの結婚のことも、「この野郎」の底なし井戸の中に沈み込んでいった。

トーピーは、ワージドのこういった気性が好きだった。ワージドは、痛手をうけた人にばいと口の悪いことを投げて気を晴らす名人だった。

それだからこそ、イッフェンを見送ってから、トーピーは食堂に行ったのだ。きっとワージドが軽口をとばして、暗い気持を晴らしてくれるだろうと期待して。

ワージド・カーンはトーピーを見て笑いかけた。

それにこたえようとして、トーピーは涙ぐんでしまった。せきをし、唾を吐くふりをして顔をそむけた。目の前には芝生がひろがって、ぼんやりした月光に照らされていた。

ハンカチで口元と目を拭いながらトーピーは食堂の中に入った。ジャズビーのはげ頭に電燈の光が反射していた。

「今晚は。」トーピーが言った。

ワージドは、よう、と言ったきり、またジャズビーの方を向いた。「ほやから、わしのいいたいのは、な、ジャズビーさん、ガーリブの詩にある甘い痛苦の感じこそ、人に真似のできんところや、いうことや。」

ここでトーピーはジャズビーに挨拶した。ジャズビーは、すりへった汚ない歯を見せてこたえた、「どや、どうしとる、友だちのイッパンが行ってしもて。」

「イッパンやない、ジャズビーさん、イッファンですよ。」トーピーが言った。「あいつは俺の友だちやったから、俺は何とでも呼べるけど、おたくはしたらあかん。」ここでワージド・カーンの方を向き、「さ、ワージドさん、ガーリブの話のつづきして下さい。」

……夕方みえるいつもの顔が段々と揃い始めて、あちこちで話の花が咲き始めた。が、トーピーの寂しさはなくならなかった。かれはお喋りや、噂話や、爆笑の渦の中で、一人沈黙の岩のように立ちつくし、波にうたれていた。

それから、みなはターラーシンの映画のどれかを観に行った。どうにかこうにか時間は過ぎていった。しかしトーピーはまたあの家に戻らねばならないのだった。トーピーは、あの家に行き、ふとんの中にもぐって、ずっと目をさましていた。どうしたわけか、久しく思い出さなかった、イッファンのお祖母さんのことが心に浮んだ。

「この目でしかと見たじゃないがの、きいたはなしじゃ。うそをついてはばちが当たる。むかしむかしある王さまがおられたと。七人のお子がいらっしやった。ある日旅に出られるに、むすめごを側によんでたずねなすった…。」

トーピーは、眠れなかったが、疲れて、まぶただけは重くふさがった。目を閉じる前に、もうアリーガルには居るまい、と心に決めた。

ある日の朝、速達をもって配達夫が来た。りんを鳴らした。随分長く待たせてから、トーピーは戸をあけた。封筒をうけとり、戸をしめた。

ややあって、また郵便屋が来た。手紙を、戸の新聞受けから中に放りこんでいった。

少ししてパンガンが訪ねて来た。ベルを鳴らしつづけたが、トーピーは出て来なかった。その次は洗濯屋が来たが、誰も出て来ないので帰って行った。

夕方、警察がやってき、戸を破った。そして、トーピーが、自分の部屋で既に冷たくなっているのが発見された。

玄関口には、封の切られてない手紙が落ちていた。消印には、ジャンムー

とあった。警官はそれをあけたが、その意味はいっこうに解さなかった。サキーナーからの手紙だった。ラーキーで結んであった。

トーピーの枕元にも一通の手紙が発見された。バハラーイチュの消印が押されてあった。封は切られてあった。仕事の就任令状だった。警官には、この手紙の意味もさっぱり分らなかった。

警官はとにかく職務上の仕事にかかった。死骸は検死のため送られた。大学は閉鎖された。青油のドクトル・ブリグ・ナーラーヤン氏に電報が打たれた。氏と共にラームドゥラーリーもやって来た。

トーピーの持ち物と一緒に、サキーナーからの手紙も、ドクトル氏の目に触れた。氏はラーキーを丹念に眺めた。ラームドゥラーリーは、また嗚咽を始めた。

「売女めが。」ドクトル氏はけがらわしい物であるかのように、ラーキーを投げ捨てた。その声のどこかにはラームドゥラーリーを泣きやませるものがあり、ラームドゥラーリーは夫の顔をうかがった。

「売女めが。」ドクトル氏は繰り返した。ラームドゥラーリーは返事に何か言おうとしたが、何も言えなかった。というのも、夫の言った言葉の意味を知らなかったからだ。

「トーピー」もまた、ラームドゥラーリーには分らない言葉であった。

● ● ●